
君へ「ありがとう」

要徹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君へ「ありがとう」

【Nコード】

N0188N

【作者名】

要徹

【あらすじ】

運動音痴で有名な鹿島俊夫は、毎年開催される運動会が嫌いではなかった。だが、鹿島に危機感はない。なぜなら、彼よりも運動音痴である、藤堂博という生徒がいたからだ。

ある日、鹿島と藤堂は出場種目を決定する際にひょんなことから「クラス対抗リレー」のメンバーとして選ばれてしまう。クラス全員から罵倒されるが、それに変更はきかず、二人は窮地に立たされる。

落胆する鹿島だったが、「あいつらを見返してやろうよ」という

藤堂の励ましによつて息を吹き返す。

そして鹿島俊夫と藤堂博の二人は、運動会に向けて特訓を始める。

一 語り始め（前書き）

この作品の制作時期は2009年9月頃で、過去作品となります。当時の私のオリジナリティを尊重する為、誤字や脱字などの修正を除いて手を加えません。気になる部分は多いと思いますが、前作と比較して作者の成長を感じ取ってもらえればと思います。

一 語り始め

—

黄金に輝くイチヨウ並木を清涼な風が吹き抜ける。風が吹く度に金木犀きんもくせいの香りが周囲に漂う。その香りを胸一杯に吸い込みながら、ある男が歩いて行く。

男は長い髪を左右に分け、スーツを着用し、凜々（りり）しい顔つきである場所を目指す。ある場所とは、取引相手の会社だ。失敗の出来ない重要な商談がこれから待ち構えているのだ。

会社が近づいてくるにつれ、自然と体が強張りはじめる。男は気を落着けるため、ポケットから飴玉を一つ取り出し、封を開いて口に放り込んだ。甘い葡萄ぶどうの味が口の中いっぱいに広がる。

飴玉を舐めながら歩いていると、取引先の会社が見えてきた。それは荘厳な雰囲気をもとい、近づき難い。しかし、それでも彼は行かなくてはならない。男の勤める会社の存続がかかっているのだ。

男の勤める会社はどこにでもある中小企業の一つだ。だが中小企業といっても、かなりの売り上げ実績を誇っており、その勢いは大企業をも凌駕りようがするほどだった。だが、昨今の金融危機の余波を受け、今や倒産の危機に瀕している。会社はリストラなどの措置を行ったが、経営状況が改善されることはなかった。そんな路頭に迷っていた企業に天から蜘蛛の糸が垂らされたのだ。

『一度弊社に来て、商品の説明を行っていただけませんか』と。

男の勤める会社の社長は、この機会を逃すまいと、会社一番の古株であり、数々の交渉を成功させた彼に、この仕事を一任したのだ。どうせこの商談が成立しなければ自分も終わりだ、と考えた彼は社長の任命を快く受けた。

普段よりも念入りに髪型を整え、髭を丁寧に剃り、スーツはクリーニングに出して見栄え良くした。

準備は万端であるのにも関わらず、いざ会社を目にすると、体は言うことを聞かなかった。男が左腕に付けた時計を見ると、九時三十分を指していた。まだ商談まで時間が少しあった。

男はもう一つポケットから飴玉を取り出し、口に頬張った。ころころと飴玉を口の中で転がし、気を落ち着けた。それでもまだ落ち着かない彼は、近くに備え付けられていた自動販売機で、ソーダ水を購入した。ひやりとした缶がとても心地好い。男は煙草も酒もしない。その代わりに炭酸飲料を愛飲しているのだ。ぱちぱちと弾ける炭酸が彼の心を落ち着けた。

男はソーダ水を一気に飲み干すと、それをゴミかごへと放り投げた。金属の触れ合う音が周囲に響く。そして、大きく深呼吸をすると会社の中へと入って行った。

中は外見の荘厳さとは違ってかわって、質素なものだった。特に派手に飾りつけられているわけでもなく、どこにでもある、ありきたりな内部構造をしていた。

受付へと真っ直ぐに向かっていき、挨拶をし、名刺を差し出した。受付嬢も元氣よくそれに応えた。

「お待ちしておりました。鹿島様ですね。ご案内致しますので、一緒に歩いてきてくださいませ」

鹿島は一礼してから受付嬢について行った。エレベーターに乗り、七階にある会議室へと向かった。七階です、という機械音がエレベーター内部に響くと、緩やかな速度で扉が左右に開いた。

「どうぞ。そちらの部屋で担当がお待ちしております」

受付嬢は一礼すると、エレベーターでまた下へと戻っていった。

鹿島は緊張のあまり、礼を言うことを忘れていた。

鹿島は一抹の不安を抱えながら、会議室の扉をノックした。すると、中から男の声が返ってきた。そして、鹿島はノブをゆつくりと回し、扉を開いた。

中には短髪で、目尻が垂れている男が椅子に座っていた。その椅子は真つ黒で、程よく艶がかかっており、とても高級そうに見える。鹿島は緊張で声が出せずにいた。会議室が重々しい沈黙に包まれている。その沈黙が破られるまで、一分となかったが、鹿島にはその時間が一時間のように感じられた。

「おはようございます」

短髪の男が沈黙を破った。鹿島も慌てて頭を下げ、おはようございます、と挨拶をした。

「どうぞ、こちらへ来て座ってください」

「あ、はい。遠慮なく」

鹿島は椅子に座ると、重大なことを思い出した。名刺を渡すこと忘れていたのだ。鹿島は狼狽して椅子から立ち上がり、申し訳ないと謝った。鹿島のその慌てようとは裏腹に、短髪の男は笑っていた。

鹿島は名刺ケースから自分の名刺を取り出そうとした。が、あまりに慌てていたためにバラバラと名刺を床へ落としてしまった。鹿島は急いでそれらを拾う。鹿島が慌てていると、短髪の男が屈み込み、一枚の写真を拾い上げた。その写真には、万国旗を背景に、笑顔の子供二人が写っていた。

「娘さんと、息子さんですか？」

鹿島はすべての名刺を拾い終わると、短髪の男の質問に答えた。

「ええ。今年で十二歳と八歳です」

「それはそれは。可愛い年頃でしょう？」

「ええ、本当に。ですけど、手がかかりましてね」

鹿島は苦笑いを一つした。手がかかるとは言ったが、それも鹿島にとっては気にならないことだった。それほどまでに娘と息子が可

愛いのだ。

「この写真は、運動会のものですか？」

「今年の運動会で撮影したものです。息子がリレーで一等賞を取りまして。その記念です」

「そういえば、もうそういう時期なんですね」

短髪の男が窓から外を眺める。短髪の男が鹿島の方を振り返ると、鹿島が声を押し殺して泣いていた。

「どうかなさいましたか？」

鹿島は涙をハンカチで拭きとり、鼻をすすった。

「いえ、運動会に少し思い出がありましてね。その時のことと、親友のことを思い出しましてね」

「ほう、それは興味深い。よろしければ話していただだけませんか？ 商談なんて、その後でも良いでしょう」

短髪の男は椅子へと座り、机に置かれている茶を啜った。

「よろしいのですか？ 少し長くなるかもしれませんが」

「ええ、構いませんとも」

「それでは、リクエストにお答えして」

鹿島も高級そうな椅子に腰掛け、一口茶をすすった。

そして、彼の運動会での出来事を話し始めた。

「どこからお話しましょうか。ああそうだ。私は小学生でした。あの時も今と同じようにイチヨウや金木犀が綺麗な時期でしたね。私はいつもこの時期が憂鬱うつうつで仕方がなくて」

鹿島は淡々と思い出を語っていく。

二 劣等感と優越感

二

黄金に輝くイチヨウ並木を清涼な風が吹き抜ける。風が吹く度に金木犀の香りが周囲に漂う。その香りを胸一杯に吸い込みながら、鹿島は教室で憂鬱な気分に使っていた。なぜならば、彼の大好きな運動会のシーズンが迫っているからだ。

鹿島は勉強こそ出来るものの、体育 というよりは運動 はまったく駄目だった。通信簿に付けられる評価も常に『1』で、周囲に鹿島ほどに運動の出来ない人間は一人しかいなかった。

その人物とは、同じクラスにいらながらも、彼とは一度たりとも話したことがなかった男子生徒だ。彼の名前は、藤堂博ふじどう ひろといった。クラスの中でも影が薄く、陰気な表情で、いつも一人でいる、まるで空気のような存在だった。

鹿島は、藤堂を見ては優越感に浸った。僕はあいつよりも運動が出来るから大丈夫。そんなことを考えてはいつも自分を正当化した。そして、下を見続け努力をせずにいた。

ちらりと藤堂の方を見てみると、相変わらず陰気な表情で俯いている。彼もまた、運動会シーズンが嫌いなのだろう。

「今年も運動会が近づいてきました。今からみんなの出場種目を決めます。みんな、全員出場競技以外に、最低一種目は出てくださいね。それでは、学級委員の人は前に出て司会をしてください」

若い女教師の声を受け、学級委員の二人が黒板の前へと立った。「じゃあ今から出場種目を決めます。一〇〇メートルは全員出場で

すから、まずは二〇〇メートル走に出たい人は手を上げてください」
男子たちが一斉に手を上げた。二〇〇メートル走というものは運動の出来る者にとって、最高の活躍の場だ。ここで一等賞を取れば、クラスの英雄になることが約束される。だが、運動の出来ない鹿島にとつては、ただ恥を晒す場でしかなかった。

どうせ出るなら、玉入れか、綱引きがいいかな。

玉入れや綱引きは団体種目であるがゆえに、鹿島一人がいくらミスをしても目立たない。それに、運動会までに開催される練習も比較的楽だ。他の種目は厳しい練習が待ち構えている。鹿島は、そんな独り言を言いながら、玉入れの出場選手を決める時を待った。

学級委員が四〇〇メートル走、騎馬戦、ミニマラソン、と手際よく出場選手を決めていく。時折、出場選手が過大な時には、じゃんけんホイ、というような掛け声が聞こえてきた。

そして、ついに鹿島の狙いの一つである玉入れの出場選手を決める時が来た。

「それじゃあ、次は玉入れに出たい人は手を上げてください」

鹿島はすかさず手を上げた。だが、さすがは楽な種目というだけあって、手を上げる人数も少なくはない。出場選手が六人に対して、八人の生徒が手を上げた。その中には藤堂の姿もあった。

「いち、にい、さん……………八人ですね。それじゃあ、じゃんけんで決めてください」

そろそろ手を上げた生徒が黒板前に集結する。その様子は戦国の合戦のようだ。皆がこの種目を譲るまい、と闘争心をむき出しにしている。ただ一人、藤堂を除いて。

「いくぞ。じゃんけん……ほいつ！」

クラスでも比較的人気のある男子が指揮を取り、合戦が始められた。さすがに人数が多いただけあって、なかなか決着がつかない。何度もありこになりながらも、着々と出場者が決まっていた。

そして、最後の勝利者を決めるところまで合戦は進んだ。残るは女子一人と、鹿島、藤堂の三人だった。決戦の火ぶたは切って落とされた。

「じゃんけん……ほいつ！」

チヨキが一人にパーが二人。

合戦は終結した。

勝利者は鹿島……ではなく、一人の女子だった。当然、藤堂も敗北者だ。戦いに勝利した女子は歓喜の叫びをあげている。ただ二人だけがやる瀬無い表情をしている。

「決定ですね。負けた人は席に戻って、勝った人は黒板に名前を書いてください」

鹿島はとぼとぼと自分の席へ戻っていった。固い木の椅子に座ると、鹿島は大きなため息をした。ため息は幸運を逃がすとは言いが、やめられなかった。ふと藤堂の方を見てみると、さつきと何ら変わりのない表情で椅子に座っていた。

「それじゃあ、次は綱引きですね。出たい人は手を上げてください」
学級委員の一言に、鹿島は息を吹き返した。それは藤堂も例外ではなかった。鹿島は勢いよく手を上げ、やる気をアピールした。しかし、またも出場人数過多だった。二度目の合戦の火ぶたが切って

落とされる。

だが、彼を待っていたものは二度目の敗北だった。今度はあいこの末の決着ではなく、一回目の勝負で敗北を喫した。またも鹿島と藤堂が敗北者となった。彼の顔から希望の色が消えた。藤堂は、生気のない顔から、さらに生気が薄れているように見えた。希望の色など、始めからないのだが。

「それじゃあ、次が最後の種目ですね」

学級委員のその言葉に、鹿島は仰天した。もう最後の種目なのか、と。そして仰天すると同時に、大きな後悔の念にさいなまれた。なぜなら、未だに出場種目の決まっていない彼らが最後の種目に出場することが確定したからだ。さっきも言ったように、一人最低一種目の出場が義務付けられている。

「最後の種目は、クラス対抗リレーですね。一〇〇メートル走のタイムが速い順から選んでいきます」

クラス対抗リレーといえば、運動会の花形だ。一つのクラス選りすぐりの人間が二チームに分かれて出場する。また、クラス対抗リレーは例年運動会の最後に行われており、これがチームの勝敗を決める。そんな重要なポジションに、運動音痴の鹿島と藤堂が立たされてしまった。

学級委員が一人、また一人とタイムが速い順に黒板に記していく。第一チームが三人、第二チームが三人書かれたところで、学級委員は手を止めた。

「ええーと。鹿島君と藤堂君だけ全員出場種目以外で一つも出場種目が決まっていないので、クラス対抗リレーに出場してもらいます」

鹿島の顔に絶望の色が浮かんだ。クラスの皆から痛々しい視線が送られる。鹿島は涙を溜め、それにじっと耐えた。だが、その我慢も無駄に終わる。

「ええー。最悪だし。なんでこんな遅い奴らと走らなきゃいけないんだよ。これじゃ、俺たちのクラス負けちゃうぞ。去年もこいつがいたから負けたんじゃない。それに、藤堂君も足遅いし」

クラスで一番足の速い男子の一言だった。その一言で、目の奥に溜めておいた涙がぼろぼろとこぼれ落ちた。止めようと思っても、悔しさで止まらない。机が涙の模様で飾られていく。

教室全体がざわざわと騒ぎ出す。そんななかでも藤堂はいつもと何ら変わらぬ表情でいた。悔しくないのだろうか。

「みんな静かに！」

女性教員が乱れた秩序を正した。教室に、鹿島の泣き声だけが残った。

「そんなことは言わずに、みんなで協力して頑張ってくださいね。諦めなければ絶対に勝てます。鹿島君、藤堂君、頑張ってくださいね」

女性教員が鹿島の元にやって来てほほ笑む。そのほほ笑みからは優しさなんて微塵みじんも感じられなかった。

最後に学級委員が締め、運動会の出場者を決める会は終わった。

放課後、皆が帰った後も鹿島は泣き続けた。何で俺がこんな目に合わなくちゃならないんだ、と自分を恨み続けた。夕日が落ちかけた時に、彼は泣きやんだ。薄暗い教室には誰もおらず、鹿島と悲しみだけが教室にいた。

「帰ろう……」

鹿島は涙を手でぬぐい、ランドセルを背負って教室を出て行った。外はすっかり夕闇に染まり、鳥が鳴いていた。普段ならば山なり河なりに寄り道をして遊んでいくが、今日はそんな気分ではなかった。一刻も早く家路について、泣きたかった。

「ただいま」

精いっぱい虚勢で帰りの挨拶をする。鹿島は部屋に戻り、ランドセルを置く。そして、ベッドの上に寝転んで、すすり泣いた。枕に顔をうずめて、泣き声が聞こえないようにする。

足が遅いことは罪なのか？ そんなことはありえないはずだ。鹿島には、なぜ自分が責められたのか理解出来なかった。

思考がぐるぐると回る。憎たらしいあの声が脳の中でリピート再生される。何度も何度も。その度に鹿島は拳を握りしめ、柔らかなベッドを殴った。

悔しさと憎しみに震えていると、階下から母親の呼ぶ声がした。

「俊夫^{としお}。藤堂君から電話だよ」

一瞬、誰だ、と思った。そして、すぐにあの陰気な表情をしている藤堂博の顔を思い浮かべる。鹿島は、藤堂と一度も話したことがなく、ましてや一緒に遊んだことなど一度もない。

一体何の用なんだろう。そんなことを考えながら階下へと降りて行った。そして、黒い受話器を手にとった。

「もしもし」

『鹿島君。あいつらにあんなこと言われて、悔しくないの？』

突然の声に、鹿島は受話器を離す。

初めて聞く藤堂の声は、優しい雰囲気をもっていた。偽善的な言葉をかける、あの女性教師よりも。

藤堂の突然の言葉に、鹿島は一瞬戸惑ったが、即答した。

この際、藤堂がどんな人間でも構わなかった。

「悔しいさ。俺だつて出たくて出たわけじゃないのに」

鹿島の目からまた涙がこぼれ落ちた。あの時の悔しさが胸に込み上げてくる。

受話器の向こう側で、藤堂が小さく笑う。

『じゃあさ、あいつらを見返してやろうよ。僕らだつてやれば出来るってところを見せてやろうよ』

藤堂の言っている意味が分からなかった。いくら努力をしても、あいつらを見返すことは不可能だと鹿島は思った。だが、あの時の言葉や気持ちを思い出すと、はらわたが煮え繰り返るような思いに包まれ、鹿島はこう答えた。

「いいよ、やってやるよ！」

また、受話器の向こう側で藤堂が笑う。

『よし、決定だね』

「でも、急に何で？」

『そりゃあ、僕も悔しいからだよ。バカにされて嬉しい人間はあまりいないと思うけど？ それに、一緒に頑張る相手がいた方が身も入るしね。だから鹿島君を誘ったんだ』

「ふうん。それで、いつから、何をするの？」

『明日から二人で特訓をしよう。内容は全部僕が決めておくから、鹿島君は気にしなくてもいいよ。放課後に学校の近くにある河原に丁度良い場所があるから、そこでやるつもり』

「うん、分かった」

『それじゃあ、また明日学校で』

藤堂はそう言い残すと電話を切った。

藤堂の声は終始落ちていたものだった。あれだけ蔑まれたにも関わらず、そんなことは歯^{しが}牙にもかけない様子だった。藤堂はあんなに強い奴だったのか、と鹿島は考えを改めた。うかうかしていれば藤堂に負ける。そんな思いを秘めて鹿島も受話器を置いた。

そして、彼ら二人の秘密の特訓が始まったのである。

三 スタートライン

三

運動場に笛の音が響く。笛が一度鳴る度に、四人の男子と女子が一斉に構えを取り、ピストルの音が鳴ると、彼らは一斉に駆け出していく。その笛の音が入る度、鹿島の心臓は高鳴った。そして、鹿島の走る順番がきた。

「位置について。よい……」

鹿島を含む四人が一斉にクラウチングスタートの構えをとる。

これが運動会での基本だ。

他にスタンディングスタートがあるが、これは運動会では使われない。使うものといえば、下級生の一〇〇メートル走か、リレーの第二走者以降だ。

今日の体育は、運動会が近いということで走行練習にあてられている。

ばあん、とスターターピストルの音が鳴り響く。

スターターピストルから白い煙が噴出される。

鹿島は一生懸命にグラウンドを駆けた。

だが、その必死な姿を横目で見ながら、クラス対抗リレーに選ばれた男子が颯爽と彼を抜き去っていく。鹿島は、自分が抜き去られる寸前に男子の顔がにやけていることに気付いた。鹿島は思いつきり歯を食いしばる。悔しくて、悔しくて仕方がない。そして、彼に追い打ちをかけるかのように他の男子生徒も彼を抜き去っていく。

彼らの姿が、どんどんと遠くなる。まるで蜃気楼しんきろうのように。

鹿島がゴールに到着すると、一緒に走っていた男子が笑いながらこちらを見ていた。

「トシ。お前本当に走るの遅いな」

颯爽と抜き去っていった男子が汗を拭いている。

鹿島は、俊夫という名前の『俊』という部分を取ってトシと呼ばれている。鹿島は、『歳』と言われているようであり良い気はしていない。

鹿島は息を切らしながらこう答えた。

「俺だつて一生懸命なんだよ」

「そうかあ。せいぜい頑張つて走つてよ」

この男子は、決して鹿島が嫌いでこのようなことを言っているわけではない。鹿島は、運動こそ出来ないものの、クラス全体からの人気はかなりあった。だが、いつも運動会シーズンにだけ、いじめにも似た待遇を受ける。

鹿島は黙ってスタート地点に向かって歩き出した。

途中、正面に目をやると藤堂がクラウチングスタートの構えをとっていた。そして、スターターピストルの音が響くと、それと同時に藤堂は転んでしまった。藤堂は涙目になりながらも一生懸命走っていた。彼の膝は赤く擦りむけていた。

藤堂がゴールしても、周囲から何の反応もなかった。藤堂はただ黙って、元の位置へと戻る。

藤堂は、クラスでは背景同然の扱いになっている。いてもいなく

ても何の関係もない。いじめの対象にすらならない。事実、彼は今日学校に来てからというもの誰とも挨拶すら交わしていない。

鹿島は、うつむいて歩いている藤堂に寄り添っていった。

「なあ、さっき転んでたけど大丈夫かよ」

「うん。ありがとう、大丈夫だよ」

藤堂が必死に涙をこらえているのがよく分かった。

やはり、藤堂は根が強い奴なのだ。鹿島は確信した。と言っても、鹿島たちは小学六年生だ。ある程度の自制は出来て当然のことである。だが、それを除いても藤堂は立派な人間だ。これ程までの完全な黙殺に耐えるということは、常人が可能なことではない。常人であれば、気が変になってしまつか、それこそ不登校にでもなってしまうだろう。何が藤堂を強くしているのか、鹿島は理解できない。

鹿島と藤堂がスタート地点に戻ると、高らかな笛の音が、まき上がる砂埃を裂いて運動場中に鳴り響いた。鹿島が校舎に設置されている時計を見ると、授業終了まで後一分というところだった。

「はい。今日の授業は全部終わり！ 教室には戻らず、ここで終わりの会をしましょう」

担任は宿題の話や、保護者に伝えておくべきことなどを端的に生徒に話した。

「それでは運動会まで後一ヶ月です。皆さん頑張って練習をしてください。さようなら」

担任の一言を受け、生徒たちは一斉に散っていった。

ただ、鹿島と藤堂を運動場に残して。

鹿島は、ずっと藤堂の赤く擦りむいた膝を見ていた。膝から滴^{したた}る血は、とても痛々しく、鹿島の心を同じように痛々しくした。友達と言えるかどうかはさておき、人が傷ついているのにも関わらず、クラスメイトは誰一人として藤堂の心配をしなかった。

「なあ。その膝、大丈夫なのかよ」

「ちよつと擦りむいただけだからね。大丈夫だよ」

「嘘つくなよ。お前、さっきから泣きそうじゃないか」

鹿島は藤堂の表情の変化を見逃さなかった。転んだ直後は泣きそうな表情だったが、今はもう泣いているのと同じような表情をしている。目尻から涙がこぼれ落ちそうになっている。傷の痛さと、周囲の冷たさが合わさり、痛烈なものとなっているのだろう。

「そんなことないよ」

「うるさい。保健室へ行くぞ」

鹿島はぶっきらぼうに言い捨て、それでも保健室に行くことをためらう藤堂に、さらに言った。

「今日の放課後から特訓を始めるんだろ？ それなのに初日からそんなことでどうするんだよ。怪我はしっかり治さないよ」

鹿島は藤堂の手を強引に引っ張って保健室へと連れて行った。こころなしか、藤堂の表情は柔らかくなり、嬉しそうな雰囲気を感じさせた。

保健室へと行くと、とても保健室の先生とは思えないほど厳^{いか}つい顔つきをした男が、長い髪を眼前に垂らして本を読んでいた。男の読んでいる本は芥川龍之介の『羅生門』だ。男は、誰がそう呼び始めたのかは知らないが『怪物黒田』と呼ばれている。

「黒田先生。こいつが怪我したんで、治してやってくれませんか」

鹿島が声をかけると、黒田は野太い声で返事をして藤堂の方へと歩み寄っていく。藤堂は黒田に怯えているらしく、蚊の鳴くような声で大丈夫だから、と言って保健室から出ていこうとしていた。これは、この学校の生徒なら誰もが通る道だということを、鹿島は知っていた。

黒田は藤堂のすぐ前で立ち止まり、傷を眺める。そして、黙って傷口を水の染み込ませたガーゼで拭きとり、次にオキシドールを別のガーゼに染み込ませて傷口にあてた。

「いてっ」

藤堂は黒田に聞こえないように小さな声で言っただつもりでいたが、黒田の耳にはしっかりと届いていた。

黒田の鋭い眼光が藤堂に浴びせられる。

藤堂は怒られる、と思ったのだが黒田からの言葉は予想以上に優しかった。男なら我慢しろ、というような過去の遺物と化した言葉は発せられなかった。

「男でも、痛いもんは仕方ないよな。泣きたければ、泣いても良いんだぞ？」

黒田は、仕上げに傷口に絆創膏ばんそうこうを一枚貼り付けた。

「これで大丈夫だ。それにしても盛大に転んだようだな」

黒田の容姿のイメージからは考えられないほど優しさに満ちた笑い声をあげる。人は見かけによらぬ、という言葉が黒田にはよく似合う。しかし、そんなことは鹿島と藤堂以外は誰も知らぬだろう。

何せ、黒田の容姿に怯えて、誰もこの保健室を利用しないのだから。

「そうなんだよ。こいつスタートした瞬間に転んだんだぜ」

鹿島も黒田と一緒に笑った。藤堂は一人顔を紅潮させている。

「君、名前は？」

黒田の言葉にびくりと肩を上下させた。優しい、と分かったはいものの、未だに黒田の厳つい容姿に慣れない様子だ。

「藤堂です」

黒田は首を縦に振った。

「藤堂君。男だからって泣いちゃいけないとか、男らしくしてないといけないだなんてことはないんだよ。自分に正直にならなくちゃ。もつとも、我慢しなきゃいけないことも沢山あるけどな」

黒田は、さっきよりも大きな声で笑い始めた。藤堂はとまどいの色を隠せずにいた。男は男らしくなければならぬ、それは当然のことだと思っていたようだ。

藤堂が黒田の言葉に戸惑っていると、鹿島が笑いながら彼の背中を三度叩いた。それに合わせて藤堂の体が前後に揺れる。

「いつまで怖がってんだよ。良い先生だろ？」

「え、ああ、うん」

藤堂の態度はいつまでも煮え切らなかったが、鹿島はそれで満足だった。

二人は、一通り黒田と雑談をした後に教室へと戻り、着替えを済ませた。藤堂は青い短パンにシャツ一枚という簡単な服装だ。特訓をすることに差支えはなさそうだ。

「じゃあ、河原へ行こうよ。鹿島君」

藤堂は小学生にしては珍しい青いランドセルを背負っている。青いランドセルには、鹿島のいる小学校のものではない校章が張り付けられている。

「張り切っていいとか」

そうして、二人は小学生らしい元気な姿で教室を後にした。

向かう先は小学校近くにある河原だ。そこには陸上競技場などにも似たトラックが用意されている。

二人が河原に辿りつく頃には太陽が橙色たいたいに染まり、川もまた同じ色に染められていた。川原で遊んでいたのであろう子供たちが帰っていく姿がちらほら見られる。

余談ではあるが、鹿島の家の特訓は五時である。が、特訓をするんだと母親に言くと、すんなり門限はなくなった。ただ、遅くなり過ぎないように、と言われただけだった。藤堂の家庭のことは分からないが、鹿島はこれで心おきなく特訓に励むことが出来るようになった。

二人は川原に備えられているベンチにランドセルを置き、手際良く準備体操を済ませた。体操の最中に周りを見てみると、ランニング中の男や、犬の散歩をしている女性など、様々な人間が日常生活を営んでいる様子がうかがえる。

「よし、準備完了だ。それで、練習は何をする？」

「鹿島君、ちょっと待ってね」

藤堂はランドセルの置いてある所まで走っていき、ランドセルの中から一枚の紙切れを取り出した。そして、それをじっくりと眺めた後にこう言った。

「まずは、軽くジョギングかな」

「軽くって言うത്？」

「んー、二キロくらいかな」

その言葉に、鹿島は硬直した。二キロというと、鹿島の通っている小学校のマラソン大会の距離の半分だ。大人の目で見れば大したことのない距離だが、子供の目から見れば相当な距離なのだ。鹿島のような運動音痴の人間には、たった二キロがフルマラソンのように感じられるだろう。少々大げさだが。

鹿島はしばらくの間ためらっていたが、決意を固めた。

「分かったよ。やるよ」

「そうこなくちゃ。えーと、ここから二キロだから……。この直線を十往復だね」

藤堂はゴール地点を指差した。彼らの目の前に伸びる道は、直線で丁度一〇〇メートルだ。彼の瞳には迷いはなさそうだ。絶対にリレーで勝ちたい、そんな意志の強さを感じさせる。

鹿島は靴ひもを固く縛りなおして、藤堂と一緒にゆっくりと駆けだした。

静かな川原に少年の駆ける音がこだまする。

静かに、着実に、息を少しずつ乱しながら駆けていく。

コースを折り返し、また同じコースを走る。

そしてまた静かに、着実に駆ける。

「はい、終わり」

藤堂はけろりとした顔で鹿島を見つめた。どうやら、藤堂には鹿島が思っていた以上の体力が備わっていたようだ。

鹿島は息を切らし、何も話することが出来ない。ただ、荒い息づかいを放っただけだった。

そんな鹿島の姿を見て、藤堂は心配そうに語りかけた。

「大丈夫？　ちよつと休む？」

「なんで、そんなに体力があるんだよ」

「ぜえぜえ言いながら鹿島が問う。」

「実はね、ちよつと前から走り込んでたんだ。もちろん運動会の為にね」

「じゃあ、クラス対抗リレーに出場することも……」

「それはさすがに予想してなかったよ」

藤堂は明るい笑顔を鹿島に見せる。夕日が後光のように輝く。

「ちよつと、休憩させて」

鹿島はランドセルが置いてあるベンチまでよろよろと歩いて行き、座ることの出来る範囲まで近寄ると、力なく崩れた。自分にはまったく体力がない、と痛感させられた。鹿島はしばらくうなだれたままでいた。

ふと鹿島が顔を上げると、藤堂が横に座っていた。さつき見ていたメモをじっくりと眺めている。

「さつきから気になってたけど、それなんなの？」

「これ？　これはね、図書館で調べた練習メニューを書いたメモさ」

「用意周到だなあ」

「もちろんだよ。僕は絶対に勝ちたいんだから。もう今年で卒業だからね。それに……」

川原の近くを走る電車で、藤堂の言葉がかき消された。鹿島はそれを聞きなおそうかと思ったが、それどころではなかった。

二人のつややかな髪が風に揺れる。

「よし、俺だつて負けてられないぞ」

鹿島は両手で太ももを叩き、一気に立ち上がった。その後、自分の頬を二度平手で打った。頬がきゅっと引き締まる。

「お相撲さんみたいだね」

藤堂はそう言うのと、くすくすと笑い始めた。鹿島もそれにつられて笑った。さつき引き締めたばかりの頬が緩む。

「俺、運動の努力は嫌いだっただけど、こんなのなら好きかな。こうやって笑いながらやるなら、問題ないよ。なんだか運動が好きになつてきた」

「あはは。じゃあ次のメニューにいかうか」

「よおし、準備万端だぞ」

「次はさつきのコースを全力で五回走るよ。その時、タイムが二十秒を上回ったらもう一本追加で」

鹿島はさつきの言葉を撤回した。

やはり運動なんて嫌いだ、と。

鹿島がゆつくりと語っていると、さっきまで快晴だった空はどんよりと曇り始めていた。一雨きそうである。だが、そんなことに気付く由もなく、鹿島は一つ息をついた。

「これが特訓一日目ですね」

鹿島はもうとつくに冷え切った茶を一口すすった。茶の苦い味が口内に広がっていく。

「面白い話ですね。実は陰で努力をしていたとは」

「いや、まったくです。それを聞いた時は本当に驚きましたね。いつも運動が出来ない、出来ないと思っていたのに。本当は私よりも出来る人間だったのですから。おっと、少し失礼」

鹿島はもぞもぞと鞆を漁り始めた。

「タバコですか？」

鹿島は首を横に振る。

「飴玉ですよ。一つ食べてもよろしいでしょうか？　どうも口の中が寂しくて」

「どうぞ。ああ、良ければ私にも一ついただけませんか？」

どうぞ、と鹿島は一言言い、飴玉を手渡した。そして、ほぼ二人同時に口に放り込んだ。

「おや、なんだか食べたことのある味ですね。何でしたっけ」

「どんぐりアメというものです。噛めばガムにもなります。小さい頃流行りませんでしたか？」

「ええ、確かに流行りましたね。当時はこんな駄菓子がご馳走でしたからね。それにしても、今時よく見つけましたね」

がりつ、という音が部屋に響く。短髪の男は早々と飴を噛み碎いてガムにしたようだ。

「近くにまだ売っている場所がありましたね。大量に買い込んでおきました。次はいつ発見できるか分かりませんし。さて、続きをお話しましょうか。特訓二日目です。これがまたみっともなく……」

鹿島は再び語り始める。

四 夕陽と友情

四

まばゆい陽光が部屋を照らす。小鳥がさえずり、新しい希望に満ち溢れる黎明れいめいの時。清々しい朝だ。時折香る金木犀の香りが心地好い。

そんな素晴らしい朝。涙の染み込んだベッドの上で鹿島は目を覚ました。が、鹿島は寝転がったままで、体を一つも動かさない。いや、動かすことが出来ないのだ。激しい運動の翌日に現れる、あの症状だ。そう、筋肉痛である。

普段から運動することのない鹿島だ。こうなることは予想していた。だが、ここまで激しい筋肉痛に襲われることは彼も予想していなかった。藤堂の作る特訓メニューがあそこまで厳しいものとは思っていなかったのだ。

鹿島はあれから、一〇〇メートルを十三本走らされた。多めに取られている八本はペナルティだ。最後は死に物狂いで走り、かろうじて十九秒を記録した。藤堂はまだ一緒に練習を続けたい様子であったが、その日はそれから入念にストレッチを行い、先に帰宅した。藤堂は川原に残って、特訓を続けたのだろう。

「俊夫。もう六時半だよ。いい加減起きなさい」

階下から母親の声がする。鹿島はゆつくりと上体を起こし、さらにゆつくりと立ち上がった。かろうじて歩けそうではあるが、とてもではないが特訓など出来ない。今日の体育は見学させてもらおう。

鹿島はそう決意した。

鹿島は階下に降り、母親に事情を説明した。母親は一つため息をついて、連絡帳へと見学する旨を記した。^{むね}最後にハンコを押し、鹿島へと返した。鹿島は、またぎこちない足取りで階上へと登り、学校へ行く準備をする。

縦じま模様のパジャマを脱ぎ捨て、動きやすい白のＴシャツに、五分丈のジーンズを着用した。髪型はいつもどおりボサボサだ。ボサボサの髪を黄色い帽子で抑え込み、黒のランドセルに授業で使う教科書を詰め込み、またゆっくりと階下へと降りた。そして、「いつてきます」と母親に一言言ってから家を出た。

空は目に痛いほどに青く、太陽光が目刺激する。鹿島は目を細めて空を眺め、考えた。

あいつ、大丈夫かな？

もちろん『あいつ』というのは藤堂のことだ。

自分が帰ってから、どれ程の練習をしたのだろう。そんなことを考えると、心配になってくる。練習をしすぎて、本番で体を壊してしまつては元も子もないからだ。

鹿島は亀のような歩みで学校を目指した。普段であれば二十分程度という簡単な道のであるが、今日はその簡単な道のりが山のようになつてた。これも少々大げさな表現である。

「おはよう……」

鹿島が教室に辿りつく頃には、遅刻寸前の時刻であった。クラス

の男子が鹿島のぎこちない歩き方を見て笑っている。その中の一人が鹿島の方に歩み寄り、話しかけた。

「ははは。おいおい、どうしたんだよ。無駄な努力をまたしてるのか？ それならやめとけよ。お前じゃ他のクラスの奴らには勝てない。いくら練習したって無駄だよ。お前は黙って棄権しろ。そうすれば他の奴が代わりに走るだろ」

その男子はひとしきり鹿島を侮辱してから自分の席へと戻っていた。鹿島の目につつすらと涙が浮かぶ。絶対に見返してやる、という闘志がごうごうと燃え始めた。

涙を抑え、自分の席へと座った鹿島は、教室を見回し、藤堂が登校していることを確認した。相変わらず、うつむいたまま、微動だにしない。昨日の活発な藤堂の姿がまやかしのように感じられる。あの意気込みはどこから来て、どこへ消えたのだろうか。

そんなことを不思議に思っていると、担任がやってきた。

今日も一日、憂鬱な授業が展開される。

スターターピストルの爆発音が運動場を覆う。今日も運動会の練習だ。今日から、種目別に練習を行っている。鹿島と藤堂はクラス対抗リレーのチームの元へと向かう。藤堂は体操服、鹿島は見学のため私服だ。

チームのリーダーにバトンが手渡されると、練習は速やかに開始された。鹿島の所属するチームと、藤堂の所属するチームとで、練習試合を行うようだ。鹿島のチームはメンバーが一人足りないの、一〇〇メートル走の選手の中から適当に一人を選んで、メンバーに加えた。適当と言っても、もちろん鹿島よりは足が速い。

メンバーが所定の位置に着くと、鹿島のチームのリーダーが大きい

な声で言う。

「行くぞー。よいい。ドン！」

その声でレーンにいる二人が一斉に走り始める。実力は五分と五分。カーブを曲がり切っても差は変化しない。勢いよく砂が舞い散る。二人の男が風を切る。

運動場を半周走ったところで、次の選手へとバトンが受け渡された。バトンの受け渡しはぎこちなく、とても上手いとは言えない。とはいえ、小学生のリレーとはこのようなものだ。個々の能力が重要だと思つて、バトンの受け渡しというものをおろそかにする。もちろん、陸上競技に精通している小学生は別だ。彼らは大人も顔負けのバトンの受け渡しを行う。

第二走者がまた半周走ると、また次の選手へとバトンが受け渡された。次の走者には、藤堂が控えている。鹿島も、その場にいれば第四走者、つまりアンカーだ。藤堂は表情を一つも変えずに第三走者が来るのを待っている。そして、藤堂にバトンが手渡された。現在、藤堂のチームがわずかにリードしている。後は逃げ切るだけだ。練習とはいえ、手に汗握る。

藤堂は勢い良く駆けだした。あまり早くはないが、春に計測された時よりかは早くなっていた。と思う。鹿島はその姿を、息を呑んで見つめた。

しかし、その勢いが空振りしたのか、カーブを曲がる際に転んでしまった。

遠心力で藤堂の体はレーンから外れ、運動場の砂が彼の体を擦った。鹿島は立ち上がり、藤堂の元へ行こうとした。が、藤堂の立ち上がる姿を見て、思い直した。

藤堂がゴールする頃には、鹿島のチームはとつくにゴールしていた。藤堂のチームの完敗だ。周囲のメンバーから冷ややかな視線が藤堂に向かって浴びせられる。藤堂はその視線を黙ってシャワーのように浴びている。

それを見ていた鹿島は思わず身震いをした。もし自分があのようになっちゃったら、同じような冷ややかな視線が浴びせられるだろう。心の隅で、あれが俺でなくて良かった、ということ考えた。だが、その考えを蹴り飛ばして、鹿島は藤堂の元へ向かった。そして、激励の言葉を贈った。周囲のメンバーはそれを鬱陶しそうに見ていたが、鹿島は気にしなかった。

「先生！ 藤堂君が怪我をしたので、保健室に行ってきます」

鹿島は担任にそう告げると、二人はお互いにぎこちない足取りで保健室へと向かった。クラス対抗リレーの練習はまだ行われている。「やっといなくなった」

そんな心ない言葉が運動場で小さく囁かれた。

「黒田先生。こいつ、また転んだんだ。治してやってよ」

昨日と同じように本を読む黒田に、鹿島は物怖ものおじせず^{ものお}に言う。黒田の読んでいる本は変わっていて、夏目漱石の『吾輩は猫である』になっている。文学小説が好きなようだ。

「お、またか」

黒田は本にしおりを挟んで、昨日と同じ手順で傷口を手当てした。藤堂が今回擦りむいたのは左足だ。見事に昨日とは違う箇所を怪我したのだ。

「怪我は男の勲章だな。何か必死にやっってるなら、これくらいの怪我はしないとな」

医療用具の入った箱を閉じ、黒田は元の位置へと座った。そして、鹿島の方へと視線を向けた。何か言いたげな目だ。

「な、何ですか？ 黒田先生」

「お前も、足が痛いんだろ」

「そんなわけではないじゃないですか。僕はすごく元気だよ」

鹿島はその場でぴょんぴょんと跳ねてみる。が、歩くことがやつとの筋肉痛だ。その衝撃は尋常ではない。電撃のような痛さが鹿島の体を貫く。あまりの痛さに、鹿島は顔をゆがめた。黒田はそれを見落とさなかった。

「なるほど、筋肉痛か。我慢してどうにかなるものじゃないぞ。ほら、こっちへ来い。また同じことを繰り返す気か？ お前は去年も

……」

「やめてよ、黒田先生。昔の話はどうでもいいよ」

鹿島は黒田の言葉を遮り、少し声を荒げて言った。そして、黒田の前の丸椅子に座った。藤堂は鹿島の姿を怪訝けげんそうに見つめていた。鹿島の太ももに黒田の手が当てられる。ゆっくりと黒田の指が鹿島の太ももに沈む。それに伴って、金づちで叩かれたかのような鈍い痛みが走る。痛みが生じる度に、鹿島は顔を歪めた。

「ここは痛むか？」

「はい」

黒田は太ももから手を離し、湿布を貼り付けた。ハツカのような清涼な臭いが鼻をつく。

「お前、昨日藤堂君にも言っただろ。男だからと言って、我慢することなんてないんだ。痛ければ痛いつて、そう言えはいい。もしそれを格好悪いなんて思うなら、そんな安いプライドは捨ててしまえ」

鹿島は黒田から顔をそむけ、小さく頬を膨らませた。彼のその表情からは、何も分かつていないくせに、というような意味を読み取ることが出来る。また、今度こそは絶対に負けられないんだ、という鹿島の闘志もその表情には表れていた。

チャイムが鳴る。

チャイムの音が静寂に包まれた保健室をさらに包む。四時間目の終わりを告げるチャイムだ。黒田は鼻で息を吐き出し優しく呟いた。

「ほら、お前らの好きな給食の時間だ。飯食つて、嫌なことなんて忘れちまえ。さ、俺も飯を食うんだ。行った行った」

その二人のやり取りを、藤堂は心配そうに見つめていた。

二人が保健室を出ると、唐突に藤堂が話し始めた。

「ちよつと僕、用事があるから。先に教室に帰ってて」

「用事？」

「うん。すぐ終わるんだけどね」

「じゃあ俺も一緒に……」

「いいから。じゃあ、また後でね」

藤堂はそう言い残すと、足早にどこかへ去って行った。

どういつことなのだろう、と鹿島は少し疑問に思ったが、腹の虫が鳴ると藤堂のことは二の次になった。それに、藤堂の目からは嘘をついているような雰囲気は感じられなかった。いつもどおりに無

表情で、いつもどおりに平淡な声だった。

教室に戻ると、既に給食の配膳が行われていた。今日の献立はコッペパンが二つに、マーガリン、ポタージュ、サラダ、それに牛乳というものだった。今日の献立は割と質素だ。鹿島は素早く列に並び、それらを受け取った。

給食の乗ったトレイを持って着席し、あたりを見回すと、藤堂の席以外にいくつか空白が出来ていた。トイレにでも行っているのだろうか。給食の時間に遅れる人間など、滅多にいない。

しばらくすると、藤堂以外の男子が帰ってきた。手をハンカチで拭いている。どうやら鹿島の予想通り、トイレにでも行っていたようだ。男子たちが手を拭いているのを見て、今週は『手洗い強化週間』だということを鹿島は思い出した。

学級委員が黒板の前に立ち、音頭を取る。

「いただきます！」

一斉に皆が食事を取り始める。未だに藤堂は帰ってこない。コッペパンにマーガリンを塗り、一口かじった。鹿島の視線の先は、教室の扉を向いている。

「トシ。どうかしたか？」

隣に座っている男子が話しかけてくる。藤堂がいないことなど、気付いてもない様子だ。

「いやさ、藤堂君がいないな、って思ってたさ」

「藤堂君？ ああ、あの子か。転校してきた時から一度しか話したことがないなあ。友達？」

「うん、まあそんなものだよ」

「ふーん。僕にはあんまり良い子に見えないよ。だっていつも暗いし、勉強は出来るけど……。何考えてるか分からないから、怖いん

だよね。何かされないように気を付けなよ？」

そんなものかな、と鹿島は思った。

不思議だった。藤堂がこの小学校に引越してきた時（その時は小学六年の春だった）は、みんなが彼に質問攻めをした。だが、一週間が経過したあたりから、まるで彼は最初からいなかったような扱いになった。誰も彼に近寄らなくなったのだ。と言っても、彼から近寄るようなこともなかったのだが。

誰も近寄らない原因は考えられないこともなかった。一週間という短期間で露呈^{ろてい}された小学生らしからぬ態度に、突飛した思考、それに近寄りがたい雰囲気。何を考えているか分からない表情。それらがみんなを遠ざけていたのだろう。得体のしれないものには関わろうとしないのが人間というものだ。クラスメイトの藤堂に対する態度は当然のことなのかもしれない。

コッペパンを一つ食べ終え、次のパンにマーガリンを塗ろうとすると、教室の扉が軋みながら開いた。藤堂だ。顔が微かに濡れており、短い髪からは微かに水滴が滴り落ちている。顔でも洗ってきたのだろう。鹿島は特に気に留めることもなく、パンを咀嚼^{そしゃく}した。そして、それをポタージュで流し込み、胃を落ち着けた。

そして、何の代わり映えもしない授業が再開される、

担任の終礼が済むと、皆一斉に教室を飛び出した。堅苦しい規律という鎖に縛られた子供たちは、放課後という時に解き放たれ、自由に羽ばたく鳥になる。最近、いささかその鎖の強度が高すぎたり、自由に羽ばたきすぎている子供がいるようだ。

夕焼けが教室を赤く染めている。最近、徐々に夜が早くなってきた。

ている。冬が近づいてきている証拠だろう。すでに鳥たちは巣に帰ったらしく、教室は怖いほどに静かだった。

その静かな教室に残っていたのは、鹿島と藤堂だった。

「これ、何なんだよ」

鹿島が怒りに顔を染めて藤堂に詰め寄る。鹿島がこれほどまでに感情を表に出すことは珍しい。

「何でもないよ。ただ打っただけだよ」

「嘘つくなよ。俺はずっとお前を見てたんだ。今日はどこにも顔をぶつけなかった」

黙り込んだまま、藤堂は顔を下に向けた。藤堂の顔には紫色の斑点が浮かび上がっていた。その斑点は見るだけで痛々しく、人の心をえぐる。

給食の時間には見られなかった斑点だった。しかし、五時間目が終わったあたりから、徐々に青じんできていた。鹿島はそれを見逃さなかった。藤堂は今日一日、転びはしたが、どこにも顔はぶつけない。鹿島が目を離れたときにぶつけたのなら、給食の時間以外には考えられなかった。しかし、ただぶつけるということも考えられない。残された可能性は、誰かに殴られたというものである。

「誰にやられたんだよ」

藤堂は何も応えない。黙って下を向いている。

「あいつらか？ お前らのチームの奴らか。黙ってたら何も分からないだろ！ 言えよ。あいつら殴ってでも謝らせてやる」

「違うよ」

蚊の鳴くような声で藤堂が声を発した。

「僕が、僕の足が遅いから駄目なんだよ。最初から、リレーなんて嫌だって言えば良かったんだ。それなのに僕は何も言わないで……」。

だから僕が悪いんだよ。殴られたって当然なんだ。もう、僕は当日に棄権しようと思う。夢を見すぎたんだ。努力をすれば勝てるって、夢を見すぎていたんだ。もう特訓はやめるよ……」

やっぱり、と鹿島は思った。

藤堂は給食の時間、自分のチームメンバーに呼び出され、棄権を迫られたのだ。おそらく、藤堂は断固拒否したのだろう。その結果、殴られたのだ。男子たちが帰ってきた時、手を洗ったのも、その時についた血を洗い流すためだろう。藤堂が濡れて帰ってきたのも、同じ理由のはずだ。

「お前だけじゃないぞ」

「え？」

「俺だって、殴られこそしてないけど、棄権しろって言われた。でも俺は特訓をやめる気なんてないぞ。絶対にあいづらを見返してやるんだ」

右手の拳を握り、真っ直ぐに机へと振り下ろした。拳に伝わる痛みが鹿島の背筋を伸ばさせた。

「そうだよな。やっぱり、見返してやらなきゃ駄目だよな。もう、僕はまた……」

藤堂はほろりと涙を流した。しかし、はっとして右手の甲で涙をぬぐった。鹿島も、必死で泣きたい気持ちを抑えていた。チームメンバーが憎くて仕方がなかった。出来ることならば顔を思いっきり殴って、土下座して謝らせたかった。だが、力で解決することは無意味だ。だからこそ、運動会という大舞台で度肝を抜いてやろうと考えた。

「ごめんね、鹿島君。僕から特訓に誘ったのに。急にやめるなんて言っちゃって。これからも頑張ろうね」

「もちろん」

「じゃあ、今からまた川原に……」

藤堂がその次の言葉を紡ごうとした時、鹿島が言葉の糸を断ち切つて言った。

「ごめん……早速で悪いんだけど」

「え、何？」

「筋肉痛で歩くことが精一杯なんだ」

ああそうだった、と藤堂は笑い、二人はそのまま帰宅した。

赤い夕焼けが二人の顔を紅に染めた。二人の顔は照れているのか、そうでないのか、夕焼けのせいでよく分からない。鹿島はその日、初めて男と手をつないだ。友情の証である。

ビルの窓に、小さな水滴が付着している。どうやら軽い雨が降り出したようだ。鹿島は傘を持っていない。

「ああ、雨が降ってききましたね」

短髪の男が髪を撫でながら言う。鹿島はその男の言葉で初めて雨が降っているということに気がついた。ふと壁に掛けられた時計を見てみると、十一時を少し過ぎたところだった。今も時計の針がゆっくりと動いている。カチカチと時を奏でる音が心地好い。

「参りましたね。私は傘を持ってきたくないんです。それに、もうこんな時間になってしまつて。まだ続きはありますが、会社に戻らな

いと……」

「そんなことはいいでしょう。商談が長引いた。ただそれだけ言えば十分ですよ。私はあなたの話の続きが気になって仕方がないので。それに、通り雨かもしれません。じき止みますよ」

「はあ……」

「ささ、早く続きを聞かせてください。これからあなたが、その友達とどうなったのか」

「まだ少し長くなりますよ？」

「構いせんとも。久しぶりに私も思い出に浸ることの出来るような話を聞いているのです。私にも、あなたと同じような友達がいましたからね」

会議室の扉が開いた。どうやら、お茶を淹れに来てくれたようだ。急須から暖かいお茶が注がれていく。香ばしい茶の香りが会議室に満ちる。良い空間だ。

「分かりました。話を続けましょう。私が筋肉痛を解消したあたりから話しましょうか。そうですね……そうだ、あの時も今と同じ小雨が降っていたんです。まだ十月というのに肌寒かったのを今でも覚えています」

五 怪物黒田

五

特訓の開始から一週間と少しが経過した。鹿島の筋肉痛は黒田の治療の甲斐もあって、三日で完治した。今ではいくら飛び跳ねても、全力で駆けても痛みはない。筋肉痛が完治してからというもの、鹿島は今までの分を取り戻すかのように特訓に励んだ。

二人が河原でランニングをしていると、ぱらぱらと雨が降り始めた。大粒な雨ではなく、霧のような雨、霧雨だった。細かい水が体に付着して、とても気持ちが悪い。持参していたタオルも、すっかり湿気を吸ってしまつて使い物にならない。

「降ってきたね」

灰色一色に染められた空を見上げ、藤堂が言う。それにつられて鹿島も空を見上げる。霧雨が目の中に入った。鹿島は目を瞬^{しほ}いた。

「本当だな。でもこれくらい雨ならなんてことないさ」

鹿島は体育で使う帽子を被った。せめてもの雨よけだ。

二人は雨などものともせず走り続けた。

河原はまだ夕方だというのに薄暗く、俗な言い方をすれば『何か出そうな雰囲気』であつた。いつもこのくらいの時間に犬の散歩に来る女性も、ランニングをしている中年の男性も、今日は見当たらない。河原には、まぎれもなく鹿島と藤堂の二人しか存在していなかった。まるで河原だけが異世界に飛ばされてしまったかのような錯覚を受ける。

「よし、次は一〇〇メートルダッシュだよ」

「来い！」

藤堂の言葉に返事する鹿島は、一週間前の鹿島とは思えないほどの生気に満ちていた。少なくとも、以前よりかは走ることが出来るようになっていたし、着実に体力も増していた。もちろん、この力の源泉は『勝ちたい』という意志だ。

藤堂がゴール地点に立ち、ストップウォッチを構える。そして、右手が大きく振り降ろされた。これがスタートの合図だ。

その合図と同時に、鹿島は駆けだした。雨にぬれて路面が滑りやすくなっているが、鹿島は転ばなかった。霧雨を切り裂き、鹿島がゴール地点を全力で目指す。両腕と両脚が汽車のパドルのように素早く動く。ゴールに引かれた白いラインはもうすぐそこだ。鹿島の胸がラインを越す。

「十七秒！ 凄いよ鹿島君。前はずっとギリギリ十九秒だったのに。特訓の成果が出ているみたいだね」

鹿島は息を切らしていない。着実に進歩している。

「まだ一本目だろ？ それに十七秒じゃあいつらには勝てないよ。せめて後一秒は短縮しないと。僕は人一倍頑張って人並みなんだ。次行くぞ！ 次！」

スタート地点まで足早に戻った鹿島は、左手を上げて準備完了の合図を出した。藤堂もそれに応え、右手を振り下ろした。ストップウォッチが時を刻み始める。

また鹿島が霧雨を切り裂いて駆ける。不思議と体が思うように動く。鉛のように重かった体では、もうない。

「十七・七秒！ ちよつと遅くなってるよ。まだまだ頑張ってる！」
「当たり前だ！」

その後、鹿島は三本、一〇〇メートルを全力で走った。そう、丁度五本で収まったのだ。ペナルティは一本もない。

「はあ……どうだ！ やったぞ」

大きく体を上下させて、肩で息をする。

「やったね！ 初めてじゃないか。五本全部二十秒を切るなんて」
緊張の糸が切れた鹿島は、濡れることも気にせずにその場に崩れ落ちた。達成感が彼の体を満たしていく。

「やっぱり無駄じゃない。無駄じゃないんだ！」

思わず鹿島は歓喜の叫びを上げた。自分の成果を噛みしめた。

「鹿島君。次は僕の番だよ。はい、ストップウォッチ」

「うん。分かった。しっかり五本で収まるように頑張れよ」

藤堂は軽く頷いて、スタート地点へと歩を進めた。スタート地点へ向かう彼の背は大きく、学校内での気弱そうな雰囲気は微塵も感じられない。それほどまでに運動会に燃やす闘志が大きいのだ。

スタート地点へ辿りついた藤堂が振り返った。霧雨と遠目でよく見えないが、藤堂の目が鋭く変化していた。表情も、無表情ではない。なんとも形容しがたい、凜々しい顔だ。

藤堂が左手を上げる。鹿島が右手を振り下ろす。ストップウォッチが平等に時を刻み始める。デジタル数字が、見る見るうちに『1』『2』『3』……と変化していく。

ストップウォッチから目を離し、藤堂の方へ向ける。両腕、両足を素早く動かし、前傾姿勢で駆けていた。学校での練習ではまったく見られない姿勢だ。そして、ゴール地点へと辿りつく。それと同時にストップウォッチの『STOP』ボタンを押す。小さな画面を覗き込むと、『十六・八』と記されていた。

「すごい！ 本当にすごいぞー！」

鹿島は自分のことのように喜んだ。藤堂はまだその喜びのわけを知らない。藤堂が鹿島の持つストップウォッチを横から覗き込むと、同じように喜んだ。

「信じられない！ 十七秒を切った！ 少し前までは二十秒近かったのに……」

特訓の成果は、藤堂にも公平に現れていた。努力は、みんなに公平な成果を与えてくれる。決して裏切らない。

雨が二人を祝福するかのように降り注ぐ。汗が洗い流されて、少しだけ清々しい気持ちなる。二人は、しばらく各々の成果に酔いしれ、自分の世界に陶醉した。

二人がぼんやりしていると、雨が大粒のものに変化し始めた。体に当たると少々痛い。熱い二人の体を、雨が急激に冷却していく。雨に打たれていると、二人は自分の世界から脱出し、雨宿りが出来る場所を探した。藤堂はランドセルを背負って狼狽している。

「どうしよう！ この雨はやばいよ。どこか濡れない場所は……」

鹿島は雨に塞がれた視界を必死で広げようとした。そして、川にかかる大きな橋を小さく発見した。あの下ならば濡れることはない。

二人は全力で走った。恐らく、さっきのタイムよりも早い。その橋に辿りつくまで、二分というところか。距離にすれば五〇〇メートルか六〇〇メートル程度。

大粒の雨が二人の体を打つ。走るスピードも相まって、雨が体に衝突する衝撃も相当なものだ。ばちばちという雨が弾ける音が耳元で鳴る。

「ああー……もうびしょ濡れだ」

ようやく橋の下へと到着した。そこは薄暗く、すぐその暗がりから世にも恐ろしい怪物が飛び出してきそうだ。

鹿島はＴシャツを絞り、水気を切った。藤堂は無言でその場へ
たり込んでいる。

「おおい、大丈夫か？」

藤堂に近寄り、手を差し伸べようとした瞬間、ぴかっと遠くの空
で何かが光った。それに一瞬鹿島は動きを止めた。そして間もなく、
暗雲を裂く閃光と轟音が周囲に満ちる。

「わあああああ！」

へたり込んでいた藤堂が跳ね上がる。鹿島が始めて見る、藤堂の
恐れる顔だ。少しだけ嬉しい。

「ただの雷だろ？」

「それでも怖いものは怖いんだよ」

「怖がりだなあ」

怖がる藤堂に構うことなく雷は鳴る。何度も光る。その度に藤堂
の身が震える。腕にはランドセルを抱きかかえている。

その姿を見た鹿島は、何かを忘れていた気がしていた。こめかみ
に指を当て、考え込む。

さつきから、やけに体が軽い……。軽い？

そうだ、ランドセルだ。教科書など、学校生活には欠かせない道
具が入ったあの黒いランドセルだ。突然の雨をかわすことだけを考
えていたために、持ってくるのを忘れてしまっていた。ランドセル
は今も五〇〇メートルほど離れたベンチの上だ。雨が強まって、さ
つきまで見えていたベンチはもう見えない。

鹿島は思わず地団駄を踏んだ。それに気付いた藤堂が言う。

「どうしたの？」

「……ランドセル忘れた」

「え？」

鹿島の言うことを信じられない、というような顔で藤堂は見つめた。呆れていると言ってもいい。

「取りに行かないとまずいんじゃない」

「そうだよ。取りに行かなきゃまずいよ。ああーもう！ どうにでもなれ！」

鹿島はまた元来た道を戻る。藤堂はぼうつとした顔つきで鹿島の背中を目で追っていた。

走る。走る。走る。これが運動会本番であればいいのに、と鹿島は何度も頭の中で反芻した。

きっと今の百メートルのタイムは十七秒を切っているに違いない、と思えるほどに全力疾走する。

間もなく、ベンチに辿りつく。木で出来たボロ椅子の上で、表面に水の波紋を広げながら置かれていた。鹿島はそれを素早く手に取り背負う。ずっしりとした重みが両肩にかかる。おそらく、教科書に水が吸い込まれ、さらに重量を増しているのだろう。

早く藤堂の所へ帰ろう。そう思った時。

何やら生ぬるい風が吹く。

気味が悪い。

閃光が空間を貫く。

鹿島は恐る恐る後ろを振り返る。

何もいなくてくれ、そう願う。

後ろを振り返ると、怪物がこちらを睨みつけていた。

鋭い目に、長い髪。

髪は雨に濡れて顔に張り付いている。

怪物は大きな手を鹿島の方へ伸ばし、肩を掴んだ。

鹿島は怪物の手を払いのけ、叫びをあげて走り出した。

「助けて！ 怪物だ！」

「待て……」

怪物が鹿島を呼ぶ。立ち止まるはずがない。いや、立ち止まれるはずがない。後ろには人を殺しそうな顔つきの怪物がいるのだ。この状況で立ち止まることは死を意味する。

殺される！ 殺される！

鹿島は走る。今までに体験したことのないスピードで。死の恐怖はドーピング剤だ。検査にも引っかからず、それでいて凄い効力を発揮する。生物の本能はすばらしい。

なんで俺が襲われなくちゃならないんだ！

鹿島は意味が分からなかった。が、その意味を考えている余裕は一切ない。心を無に帰し、走ることにだけに専念する。橋はもうすぐだ。早く藤堂に知らせて逃げないと 二人とも殺される

橋に辿りつき、危機を告げる。

「藤堂！ 早く逃げるぞ、怪物だ！」

「え？ 鹿島君、何言って……」

「もうそこまで来てる！ あ……………」

鹿島が振り返ると、すぐ後ろに怪物の姿があった。また大きな手を伸ばし、鹿島を掴もうとする。怪物の姿はさっきよりもひどく、醜くなっていた。

もうここまでか。鹿島は声を無くし、怪物を目を見開いて眺めた。必死に見開いた目から涙が落ちる。終わりだ。

そして、怪物の魔手が鹿島にかかる。

「おい、鹿島。誰が怪物だって？」

その声には聞きおぼえがあった。しかし、脳がマヒして思考が来ない。脳は恐怖で硬直している。

「あれ？ 黒田先生じゃないですか？」

黒田先生じゃないですか？ 藤堂のその一言が、鹿島の脳の硬直を解いた。

「エッ？ 黒田先生…………？」

「俺以外に誰がいる？」

怪物は顔に張り付いた髪を後ろに撫でつけ、深いため息をついた。

「あ、ああ…………」

鹿島を縛りつけていた緊張の糸がぷつりと切れ、そのまま冷たいコンクリートの上へと寝ころんだ。

ひんやりとした感触が心を落ち着ける。

「まったく。川原にお前らを見つけたと思ったら走り出して、ランドセルを見つけたと思ったらまた走りだして。拳句の果てには俺を怪物扱いか？」

黒田がワイシャツの水気を絞る。ぱたぱたと吸収されていた水がコンクリートへ落ちる。小さな水玉模様がコンクリート上に広がっていく。その模様が、不思議と何かの顔に見える。

「藤堂君は俺と二度しか会っていないのに気付いてくれたんだぞ？ それなのにお前は何なんだ。去年から事あるごとに保健室に顔を出しておいて、未だに俺の顔が覚えられてないか」

黒田は鹿島の頭を脇の下にはさみ、頭のとっぺんを拳でこすった。ごりごりとした拳が少し痛い。鹿島は手で黒田の背中を二度叩いた。降参の合図だ。鹿島は解放される。

「ところで、黒田先生は何でこんな所にいるんですか？」

「そうだよ。何でこんな所に。俺たちが特訓してるってこと、言っていないだろ？」

二人で黒田の方へ詰め寄る。藤堂は純粋な気持ちで質問していたが、鹿島は何かして脅かした仕返しをしてやろうと企んでいた。が、その企みは永久に実現することはない。

「俺は帰りにこの川の堤防を通るんだ。これで満足か？」

黒田はにやりと不敵な笑みを浮かべて話を続ける。

「それに……特訓していたのか。まあ、前から見ていたし、薄々気付いてはいたがな。お前は筋肉痛で俺の治療を受けた。お前がこれ程真剣に運動に打ち込むには理由がある。まあ、運動会しかないがな。絶対に勝ちたい。去年の恨みを晴らしてやる。これだけだ。違うか？」

特訓の理由まで言い当てられた鹿島は頬膨らませてそっぽを向い

た。藤堂だけはまっすぐに黒田を見ている。黒田はしてやったりという風な顔をしている。何とも大人げない。

「せっかくお前らの為に差し入れを持ってきてやったというのに。怪物扱いされるんじゃ、やめだな」

黒田が背中に戻していたショルダーバッグを前に回して、手をかける。ショルダーバッグには何やら筒状のものが入っているらしい。黒田の表情は優しいものに变化している。

「なになに？ いいもの？」

興味津々にショルダーバッグへと目をやる。

「お前らの態度次第で良いものになる」

「怪物だなんて言ってごめんなさい」

「よし」

黒田はショルダーバッグのフタを開き、二本の飲料水が入った瓶を取り出して、二人に手渡した。冷たい瓶が火照った体を冷やす。

「これって、サイダー？」

鹿島の言うとおり、黒田が手渡したものはサイダーだった。当時の子供たちが清涼飲料水を飲むなど、滅多になかった。飲めて麦茶だ。それに、炭酸を飲むと骨が溶けるんだ、と根拠のないことを言われて買ってもらえなかった。買ってもらえたとしても、月に一回がせいぜいだった。鹿島にとって、サイダーは憧れだった。その憧れが今、目の前に存在するのだ。小さな気泡が瓶の中で楽しそうに踊っている。見ているだけで幸せになる。

「黒田先生。ありがとうございます！」

二人揃って礼を言う。黒田は思い出したかのように栓抜きをシヨルダーバッグから取り出し、鹿島に手渡した。鹿島は嬉しそうに栓抜きで瓶のフタを抜いた。すると、勢いよく中身が飛び出し、泡と共にコンクリートへと流れた。これで少しだけではあるが飲むことの出来る量が減った。

「ああ、もったいない。藤堂、もう少し置いてからフタ開けた方がいいぞ」

藤堂はくすくすと笑い、サイダーをコンクリートの地面へと置いた。瓶が置かれるとき、澄んだ音がした。鹿島はこぼれそうになるサイダーを喉へと流し込む。清涼な感覚が彼の喉をうるおしていく。

「黒田先生」

「ん？ 何だ」

藤堂はおずおずと、小さく口を開いた。

「以前、保健室で治療を受けた時にも気になっていたんですけど、鹿島君、去年に何かあったんですか？」

「ああ。こいつは去年の運動会で」

「やめてくれよ！」

サイダーの瓶から口を離し、雨を裂くような大声で言う。

「鹿島君。僕は君のことが知りたい。運動会で何か失敗したのなら、それを教えてよ。僕に何か出来るかもしれない」

鹿島は明後日の方を向き、もうどうにでもなれ、といった風な態度をしている。黙ってサイダーを少しずつ飲む。黒田はその姿を見て少し迷ったが、話を続けることにした。

「こいつは、去年も今と同じように特訓をしたことがある。運動会が開催される二ヶ月前からな。いつまでも運動の出来ない馬鹿でい

るのは嫌だつて。こいつは、過去四年間いつも運動会で活躍できずじまいだ。毎回毎回失敗の連続。誰にも勝てないなんて当たり前。そんな自分に終止符を打ちたい、ってな」

「そうだったんですか……。でも、じゃあ何で今年は自分から特訓しなかったんですか？ 仮に少しでも運動をしていたのなら、あんなにひどい筋肉痛には見舞われなかったと思います」

「去年の失敗はひどかった。もう努力なんかしない、って思えるほどに。だから練習をしなくなかったんだろう」

「何があつたんですか？」

藤堂は栓抜きでサイダーのフタを外し、少しだけ飲む。相変わらず鹿島は明後日の方向を向いている。黒田は気にせず話す。

「負けたんだよ。こつぴどくな。こいつは去年もクラス対抗リレーに出場していた。その時はアンカーだったかな。第三走者までは順調に順位を上げていつて、後は逃げ切るだけという状況だった。だが、こいつは負けた。もう勝てる、そう確信した瞬間に負けたんだ」
黒田は短く生えた髭を撫でる。そして、鹿島の方をちらりと見ると、こちらを向いて、膨れていた。

「なんで……」

「ゴール前での大転倒だ。真つ白な勝利のロープを切る。その直前だ。こいつは何につまずいたのかは知らないが、顔から地面に衝突した。相当痛かっただろうな。けれども、自分がどれだけ痛がつていても時間は止まらない。その間に他の走者がどんどんゴールしていく。自分が切るであろう勝利のロープは他人に切られた。その後のこいつはクラス内で、それはひどく責められたそうだ。そうだったな？ 鹿島」

そうです、と小さくつぶやく。

「そんなことがあったんですか」

「ああ。俺と鹿島が初めて話したのも、その時だった。赤ん坊みたいに泣いていたよ。そりゃあ泣きたくなるだろうな。精いっぱい努力して、それが報われないんだから。それどころか、運動の出来ないやつ、というレッテルを剥がすことすら出来なかった」

報われない努力というものはただの徒労だ。それを鹿島は小学五年生という幼い頃に味わわされていた。幼い頃に負わされた傷はなかなか消えない。それどころか、時として深さを増すこともある。もう努力なんてしない、そう思うのも当然のことであろう。

「努力なんてしない。俺はそう決めてた。今年も思いつきり負けてやろう、なんて考えてた。多分、藤堂が特訓に誘ってくれなかったら、あの時の悔しさを思い出すことはなかったと思う。俺はずっと負け犬だったと思う」

鹿島は頭をぼりぼりとかく。照れ隠しだ。

「そうだったんだ」

藤堂はサイダーの残りを一気に飲み干す。そして立ち上がり、鹿島の方へと歩み寄る。肩を持ち、囁く。

「なら、尚更負けるわけにはいかないね！ これからも頑張ろうよ！ 後三週間もあるんだからさ」

鹿島は思わず涙を流した。一時とは言え、藤堂のことを見下していた自分を恥じた。そして、顔を上げて元気よく藤堂の言葉に応える。

「当たり前だ！」

雨はすっかりあがり、恐ろしいほど真っ赤に染まった空が雲間か

ら顔を出し始めた。夕日の光が二人を照らす。その光は二人の燃え上がる闘志のようにも見える。

黒田は黙って二人を笑顔で見つめていた。

六 ライバル意識

六

特訓の開始から三週間が経過した。あれから雨は一切降らず、常に快晴。まさに特訓日和の連続だった。まるで二人の決意を後押ししているかのように感じられる。二人は土日も変わらずに特訓をした。土曜日は午前で授業は終わるし、午後はフリーだ。日曜にいたっては丸一日空いている。絶好の特訓日だった。今日は日曜日だ。

いつもの川原で気合いの入った声がする。

「後一本だよ！ 頑張つて！」

一足先に新トレーニングメニューである『二〇〇メートル三本』を終えた藤堂がストップウォッチを片手に叫ぶ。

「おお！」

鹿島は余裕の表情で答える。

もう三週間前の鹿島ではない。まったくの別人になっている。藤堂から効率の良いフォームを教えられ、筋力以外の部分も強化されていた。情けない鹿島の姿は消え去った。

あれから、鹿島は弱音の一つも吐かなかった。学校で棄権をしろ、と詰め寄られても悲しくなくなっていた。それどころか、せいぜい努力しろよ、と思うようになっていた。

普段から運動をしない者が急に本来の実力を発揮することは不可能だ。本番で発揮出来ない実力は実力とは言わない。それを鹿島は分かっていた。他のリレーメンバーは学校以外で練習はしていない。

鹿島とメンバーとの実力差は微々たるものに变化している。

その証拠に、学校で行われる練習で、確実にチームメンバーよりも良い動きをしていた。鈍く、ゆっくりと腕を動かす彼らよりも、鹿島は素早く、風を切るようにして腕を振っていた。そして、もうすでにメンバーの内の一人のタイムを超していた。しかし、メンバーはそれをまぐれだとしか受け取っていないようだ。

藤堂の方はというと、あまり成果は芳しく^{かんば}ない。タイムを計測しても鹿島よりも遅かったし、体力も伸び悩んでいる。藤堂はそれを少し気にしているようだった。だが、一言もそんなことは言わず、黙々と練習に励んでいた。

「三十九秒ちょうど！ お疲れ様！」

ぜいぜいと息を切らして鹿島は膝を折る。このメニューでは特にペナルティは課されないが、鹿島はそのすべてを全力で行った。少しでも練習を怠れば、今までの苦労がすべて水の泡になってしまうような気がした。勝利をうたかたの夢とするのは御免だった。

「良い調子だね」

満面の笑みでタオルを持って鹿島の方へ歩み寄る。鹿島はタオルを受け取り、溢れ出す汗を拭きとる。そんな鹿島の姿を見ている藤堂は、とても嬉しそうだった。

藤堂も、以前とはずいぶん変わった。常に何を考えているか分からない表情だったが、今では笑っていることが多い。常に感情を表に出さなかったが、今では嬉しい、悔しい、などの感情を表に出すようになっていた。これもひとえに、特訓と鹿島のおかげだろう。

「もしかしたら、勝てるかもしれないな」

拭いても、拭いてもあふれ出てくる汗を何度も拭く。拭き損ねた

汗が地面に落ちてじわりと滲む。

「鹿島君が一生懸命頑張ったからだよ。当然のことだよな」

「そうだなあ。もうあいつらに負ける気はしないな」

鹿島の顔は自信に満ち溢れていた。悪く言えば天狗になっていると言っても良いだろう。

「もう僕なんかとつくの昔に抜かしちゃったね。僕の方が早くに特訓を始めてたっていうのに」

笑ってはいるが、そう言う藤堂の目は何となく寂しげだ。

「まだ後一週間もあるんだし、大丈夫だよ」

「そうかなあ……」

しばらく休憩した後、二人は川原を離れて町内をランニングして回ることにした。いつまでも川原にいては気が滅入ってしまうし、なにより藤堂に気分転換が必要だと鹿島は判断した。町内は昼前だというのに人が少なく、閑散としていた。二人は黙って走っていく。

途中、クラスの人間に遭遇したが、無視をした。清々しい天気なのにも関わらず、二人の周りには重い空気が漂っていた。その空気に耐えかねた鹿島が藤堂に話しかける。

「なあ、藤堂」

「なに？」

「タイムが伸びないのってさ、張り合う相手がいないからじゃないか？」

「張り合う相手は隣のクラスの人たちでしょ？ あ、とりあえず自分のクラスの人たちもかな？」

「んー……やっぱりライバルって身近にいた方がいいと思うんだよな。うん。あ、その角は右に曲がって」

鹿島が右手で進行方向を指さす。駄菓子屋の前を横切り、また走り続ける。遠くに犬を散歩している男性が見られる。

「そうかなあ」

「そうだよ。だからさ、俺と対決しない？」

「え？ 何で？ 僕は同じチームじゃない」

「一緒のチームだけどそうじゃない。お互いアンカーだし、どちらが一等賞を取るか。どう？」

「う、うーん……」

この提案は以前の鹿島では考えられないほどにアクティブなものだった。

「いいよ。やる！ でも、やるからには絶対に負けないからね。覚悟しておいてよ！」

藤堂からみるみるうちに気迫が溢れ出す。どうやら鹿島の提案は大成成功だったようだ。他の人間がヘマをすることで勝率が変化することには目をつむる。まずはなにより、藤堂を励ますことを優先した。

「よし！ そうこなくっちゃな」

「絶対に、負けられないね。この運動会は」

そう言つと、藤堂がペースを上げて走り出した。俄然、やる気になったようだ。鹿島も、その後に懸命について行く。

青い空が清々しい、日曜の午後。

七 一等星

七

きらきらと光る汗が一滴、一滴と重なり、努力が形を成していく。その形はいびつだが、とても美しい。

二人は、昼過ぎから模擬運動会を行うことにした。もちろん、彼らが出場する一〇〇メートル走と、クラス対抗リレーだけである。二人は横一列に並び、合図を待つ。その合図とは、川にいるシラサギが飛び立つときだ。二人の視線は一匹のシラサギに集中している。

シラサギがくちばしで水面をついばむ。

ちよこちよこと歩く。

羽を折りたたむ。

羽を広げる。

羽の手入れを始める。

少し羽をばたつかせる。

二人は、今か今かとシラサギが羽ばたいて行くのを待っている。汗が少しずつ流れてくる。ずっとスタートの構えを取ったままだ。このままでは、シラサギが飛び立つ前に体力の限界がきてしまう。

鹿島は少し気を緩め、右手で汗をぬぐう。

その時、シラサギが飛び立った。

美しい白い羽を広げ、大空のかなたへと。

藤堂はそれと同時に走りだした。

鹿島は出遅れる。

必死で藤堂を追う。

しかし距離は縮まらない。

視界が上下に揺れる。

息が荒くなる。

四肢を機関車のパドルのごとく動かす。

藤堂が両手を上げ、ゴールに辿りつく。

「勝ったあ！」

ゆっくりと歩きながら、藤堂が感嘆の声を上げる。

「はあ、まいったよ」

油断していたとはいえ、ついさっきライバル宣言をした相手に負けてしまった。それも、優位に立っていた相手に、だ。これが本番でなくて良かった、と鹿島は思った。

本番中に気を抜いて、もしくは観客に目を取られていて負けてしまったのでは、笑い事にならない。ただ視線は走者だけを見るのだ。他人など、気に留めてはいけない。たとえ、親友が転ぶとも。いわば、運動会は戦争なのだ。負傷者に気を取られていては、自分まで一緒に怪我をしてしまう。そんなことが続けば、自分たちの国は負けてしまうのだ。そして、負けた先に待つものは……。

「やつぱり、意識が違つとすごく変化するね。なんというか……ああ、もう！ 何も考えられないや」

藤堂はその場でばたりと倒れた。激しく肺を上下させている。鹿島も、藤堂の横に腰を下ろした。

「油断したよ」

負け惜しみだ。

「でも、フォームも違った。多分同時に走ってても、藤堂の勝ちだったよ。おめでとう」

藤堂はにっこりと笑む。

「それは、運動会で勝った時に言ってよ」

「本番じゃあ、絶対に負けないから。覚悟しておけよ」
それから、二人は何度もそれを繰り返した。

秋が深まってきているのか、最近暗くなるのが早くなってきている。冬の到来は近い。

二人は長袖のジャージを羽織り、ベンチに腰掛けている。空は薄暗く、一等星が輝いている。息を吐けば、かすかに白くなる。周囲からは、たまに車のエンジン音が聞こる。耳を澄ませば、川の流れる音が聞こえる。静かな空間。

「綺麗だね」

藤堂が星空を眺めている。

「うん」

きらきらと輝く星が、彼ら二人に祝福を与える。

「なあ、藤堂。ずっと聞きたかったことがあるんだけど、今聞いてもいいか？」

「許可を取る前に、質問を言うべきだよ」

藤堂は顔を鹿島に向け、無邪気な笑みを浮かべる。

「藤堂さ、何でこんなに頑張れるの？ 本当にただ、俺たちを見下した、最低だって言った奴らに勝ちたいだけ？ 少なくとも、俺はそれだけだよ。ただ、あいつらに勝ちたいんだ」

藤堂は口をつぐむ。少し顔を下に向け、物憂げな表情を浮かべる。鹿島は、その顔をただじっと眺めていた。

どれくらいの時が経っただろうか。薄暗かった空はすっかり黒くなり、わき役だった星々たちの光も見ることが出来るようになっていた。早くから見えていた一等星は、より輝きを増し、美しい。星と月の明かりが、二人を照らしている。

藤堂は小さく口を開き、言葉を漏らす。

「僕のお父さんがね、入院しているんだ」

「え？」

「結構重い病気らしいんだ。僕も詳しくは聞いてないけど、お母さんの表情を見てたらわかるんだ。お父さんは相当まずいはずだよ」

藤堂の淡々と語る口調は、戸惑いも、焦りも、何も感じられないものだった。まるで、父親が病気になっっていることも嘘だと思えるほどだ。しかし、表情は硬く、冷たい。真剣だ。

「それでね、僕はお父さんに運動会で勝つて約束したんだ。お医者さんもさ、僕が勝てば、きつとお父さんも病気に勝てるんだって言ってた。それに、僕は運動会でいつもビリだったから、少しはお父さんに良いところを見せてあげないと。最後まで格好悪い僕じゃ、申し訳ないでしょ？」

それは、最後に父親に晴れの姿を見せよう、という考えにも思えた。藤堂は純粹に医師の言うことを信じているのだろうか、それとも、父親に起こる奇跡を信じているのだろうか。それと「だから、僕は何が何でも負けられないんだ」

藤堂は鹿島から目をそらし、星空を見上げる。藤堂の目尻に、何やら輝くものが見える。涙だ。

藤堂は泣きたいのだ、と鹿島は察した。それなのに、今までずっと我慢してきたのだろう。父親に弱いところを見せないために。だから、あれだけクラスで罵られても、転んでも、泣かなかったのだ。

「なあ、藤堂」

「何？ 鹿島君」

呼びかけたものの、その場に適した言葉が見つからない。こういう時、何と言えばいいのか、分からなかった。そこで、黒田の言葉を借りることにした。

「泣きたければ泣けよ。男だからって、泣いちゃ駄目だつてきまりはないんだよ」

星空から目を離し、藤堂の方を見る。すると、彼の目から大粒の涙が零れ落ちているのが分かった。声はあげていない。唇をゆらしながら、黙って泣いている。

鹿島は彼に寄り添った。すると、藤堂は声を上げて泣き始めた。今まで我慢していた分の涙も、これから流すはずの勝利の涙も、すべて出しつくかのように、泣いた。

一等星の光が美しい。しかし、これほどの美しさも、わき役の星たちがいなければありえないだろう。花束にしてもそうだ。美しい花たちの中に、カスミソウを入れる。カスミソウは引き立て役だ。今まで、彼らはその引き立て役だった。だが、今回はそうではない。彼らはきつと、美しい花の、星の一つとなるだろう。美しい一筋の光を放つ、一等星に。

八 疾走

八

運動会本番。ついにやってきた大舞台。空は青く晴れ渡り、雲ひとつない。まるで、早くも彼の勝利を祝福しているかのように見える天気だ。

鹿島は昨日の晩、なかなか眠ることが出来なかった。とうとう自分の努力の成果を見せられるのだ。これほど嬉しいことはない。クラス奴らは、きつと度肝を抜かれるだろう。そう考えるだけでにやけが止まらなかった。

昨日、土曜日。小学校では最後のリハーサルが行われた。入場から、選手宣誓、選手の招集、応援合戦、退場まで。一部の競技については、模擬試合も行われた。クラス対抗リレーも行われたが、誰一人として本気で走る者はいなかった。リレーメンバー全員が、本番で驚かせてやろうと考えているのだ。子供の心理は実に単純で、分かりやすい。

鹿島の今日の体調は万全だ。痛いところもかゆいところも、一つもない。布団から起き上がり、軽くジャンプを試してみる。そして、自分の体が軽いことに気付く。

二人は、運動会本番三日前から特訓を中止することにした。理由は単純なもので、本番に疲れがきて走れなくなったら駄目だ、というものだった。これは藤堂の提案だ。おそらく、藤堂が止めなければ、本番前日まで根詰めて特訓をしていただろう。この体の軽さは、藤堂がいたからこそ実現したものだ。彼には、感謝しても感謝し尽くせない。

鹿島は体操服に着替えて、小さめのリュックを背負って学校へと向かう。冬が近い秋の朝は、ひどく寒かった。鹿島は少し体を丸めて歩いた。

教室に到着すると、ほぼ全員が顔を揃えていた。さすがに運動会本番に遅刻する人間はいないようだ。教室全体が張りつめた空気になっていて、普段からおちゃらけている生徒もおとなしかった。

鹿島が席に着くと、早速呼び出しを受けた。彼のチームメンバーからだ。

「おい、トシ。足とか痛くないか？」

柄にもなく、一人の男子生徒が鹿島の肩に腕を回す。

「無理して、体を壊したら、元も子もない」

「俺たちは、トシを心配して言ってるんだ」

「大丈夫だから」

鹿島がそう言うのと、他の三人は舌打ちをして去っていった。

彼らの言いたいことは分かっていた。棄権しろ、と遠回しに言っているのだ。決して、鹿島の身を案じているわけではない。まだ、彼らは鹿島のことを役に立たないノロマだと思っているのだろう。

藤堂も同じことをされているのではないか、と思い、教室内を見渡してみる。案の定、藤堂の姿は、彼のチームメンバーの姿と共に消え去っていた。鹿島は心配に思い、教室を出て行こうとした瞬間、藤堂が姿を見せた。

彼の顔は笑顔だ。傷一つない。

「どうしたの、鹿島君」

「お前、大丈夫だった？ あいつらに何かされなかったか？」

「ふふ。言っちゃったよ。お前らにも、他のクラスの奴にも負けないうて。そしたら黙ってどこかに行っちゃったよ」

「ぷっ」

二人は、入口の前で顔を見合わせて笑った。藤堂と特訓を始めてから一ヶ月。これほどまで笑ったことはなかった。どちらかといえば、泣いている時の方が多かった。今、こうして笑っていられるのも、藤堂のおかげだと鹿島は心の中で感謝した。

とうとう運動会が開催される時がやってきた。学年全員が運動場に出て、入場門の外でクラスごとに整列して待機する。鹿島には、まだ心にゆとりがある。藤堂は鹿島よりも後ろに並んでいるので、顔をうかがうことは出来ないが、恐らく余裕があるだろう。だが、他の生徒はどうだろう。きっと緊張して、あまり話したくない気分だろう。周囲の会話をしている生徒すべてが、緊張を紛らわせるために話しているのではないかと思われた。

『これより、第二十九回運動会を開催します！』

と、女性の声でアナウンスが聞こえる。とうとう運動会が開催される。鹿島は心の中で気合いを入れる。アメリカ合衆国の行進曲である、『星条旗よ、永遠なれ』がスピーカーから流れ始める。

『紅組の入場です！ 拍手でお迎えください！』

それを合図に、先頭を六年生の応援団長が大きな旗を持って歩いて行く。旗には燃え盛る炎とバラが描かれている。まさに紅組の名にふさわしいと言える。

学年順に入場門から出て行き、またアナウンスが聞こえる。

『僕らの心は燃えている！ 僕たちに待っているのは完全燃焼、完全勝利だ！』

紅組のキャッチフレーズだ。なかなかセンスがある。

応援団長について行くように、学年順に入場門から出て行く。手の動きも、足の動きもきっちり整っている。

『続いて、白組の入場です！』

鹿島たちのチームだ。自然と背筋がピンと張る。

白組の応援団長が、旗を持って意気揚々と飛び出していく。白組の旗には淡い黄色の月と真つ白な狼が描かれている。狼は口を大きく広げ、何かに向かって突進している。

『月のような繊細さ、狼のような豪快さ！ 二つを合わせもつ僕らに勝てるやつはいない！ 油断をすると噛みつくぞ！』

最後の一言が余計だ、と行進をしながら鹿島は思った。

入場門から出て、運動場をぐるりと一周回る。運動場には、すでに多くの保護者が来ており、より一層緊張感を高める。運動会本部にはテントが張られていて、そこでアナウンスが行われている。そして、その横に救護班があるようだ。黒田もそこにいる。もしかすれば、ここにお世話になるかもしれない。

空には万国旗が飾られ、随所にスピーカーが取り付けられている。壇上の後ろに、国旗が掲げられている。

『最後は、青組の入場です！』

他の組と同じように、応援団長が先陣を切って出てくる。彼らの旗には泡と川、そしてペンギンが描かれていた。

『冷静に戦い、冷静に勝つ。水のようにしたたかに、清らかな勝利を僕らは勝ち取ります！』

常に冷静ということはいいいものだ。変に力を入れ、興奮しても勝利は勝ち取れない。

こうして、すべての組の入場が終わった。

運動場がしんと静まり返る。壇上に校長が登ってきた。普段はスーツだが、今日は紺色のジャージを着ている。教職員が対象となるリレーがあるのだ。

校長はマイクを手に取り、演説を始めた。視線の先は保護者席だ。『秋も深まり、良い季節となりました。まずは、ご来賓の方々、保

護者の皆さま、ご来場ありがとうございます。彼らは今日まで一生懸命に頑張ってきました。舞台は整っています。後は、お子様方を信じて、暖かく見守っていただきたく存じます』

ごほん、と一つ咳をして続ける。

『そして、生徒の皆さん』

校長が生徒の方を見る。

『昨年オリンピックで活躍された男性は知っていますか？ 彼は、みんなから金メダルを期待されていたのですが、惜しくも銅メダルを取ることは出来ませんでした。彼は悔しかったです。優勝者の人が憎かったでしょう。ですが、彼は優勝者を称えました。皆さんも、彼を見習って、どの組が優勝しても、誰が勝っても負けても、拍手で称えてあげてください。それでは、あまり長くなると皆さんのやる気がなくなってしまうので、このあたりで終わりにします。今日は、全力で頑張ってください！』

生徒たちから拍手が送られる。

こういう、一つのエピソードを元にした話というものは心に響く演説というものは長ければ長くなるほどに、面倒くさく、胡散臭くなるものだ。この校長は良く分かっている。短い話で、的確に生徒たちの緊張を和らげた。良い校長だ。

『選手宣誓！ 生徒代表は前へ』

「はい！」

三つの声をする。

三人の生徒は、右手を上げ、声を張り上げる。

「私たちは、スポーツマンシップに乗っ取り、正々堂々と戦うことをここに誓います！」

後ろから旗を持った生徒がやってきて、三人に各団旗を手渡す。代表の三人はその旗を掲げ、先端を一か所に集める。そして、大きな拍手がわき上がった。

それから、退屈なものだった。来賓の挨拶も、保護者代表の話

も、校歌斉唱も、国歌斉唱もだらだらと長く続き、苦痛だった。鹿島は終始ぼうつとしていた。まじめに聞いていたのは、校長の話と、選手宣誓だけだ。

そして、終わりを告げる言葉が出てくる。

『これで、開会式を終わります。それでは、生徒の皆さんは応援席に戻ってください。六年生の男子・女子一〇〇メートル走に出場する人は、入場門に集まってください』

早速の出番だ。しかし、本番はそこではないことを覚えておかななくてはいけない。本番はクラス対抗リレーなのだ。それまで、体力は温存しておく。

入場門に、六年生全員が集まってくる。みんな緊張しているように見える。鹿島は、その群れの中に藤堂を見つけ、話しかける。

「緊張してる？」

「ううん。まだ大丈夫。だけど、スタートラインに立ったら緊張すると思う。鹿島君は？」

「俺は大丈夫。もう何も怖いものなんてないよ」

鹿島は勢いよく胸を叩く。

鹿島には、昨年以上の没落は考えられなかった。彼は、あれ以上の絶望も、失望もないと思っていた。鹿島が緊張していないのはこのためだ。去年以上にひどいことにはならないから大丈夫

「きつと、藤堂も勝てるさ。リラックスしよう」

鹿島は藤堂の背を叩く。

「でも、俺たちが勝つべきところはクラス対抗リレーだから。それまでは、力を温存しておこうと思う」

「僕は……この一〇〇メートルも本気で走るよ」

「そっか。あ、先生が呼んでる。そろそろ出番だ」

入場門の方を見ると、六年生男百と書かれたプレートを持った教師が数人立っていた。鹿島は右から一列目の八番目に並ぶ。藤堂は

二列目の一番目だ。

一〇〇メートル走は、男子、女子に分かれて、合計一五試合が行われる。男子が八試合、女子が七試合だ。

『ただいまより、六年生男子一〇〇メートル走を行います！』

試合開始を告げるアナウンスが流れる。そして、スピーカーから、今度は、『双頭の鷲の旗の下に』が流れ始めた。この曲は、ヨーゼフ・フランツ・ワーグナーが作曲したもので、運動会では定番の曲だ。

軽快なリズムに合わせて選手が入場していく。そして、一直線に一〇〇メートル走のスタート地点へと向かう。曲が終わりかける頃に、全員がそこに整列した。

『双頭の鷲の旗の下に』がスピーカーから聞こえなくなると、次は『天国と地獄』が流れ始めた。これも、運動会ではよく聞かれるものだろうと思う。この曲の作曲者はジャック・オッフエンバックだ。最初の数秒は静かな曲調だが、しばらくすると激しくなっていく。人のやる気を上げるには最適な曲だ。

スタート地点に辿りついた生徒たちが、はちまきを頭に巻く。

『第一レース、位置について！』

藤堂を含めて六人がスタートラインに立つ。学年でも、際立って足の速い生徒が一人混じっている。その生徒は、足首をゆつくりと回したり、首を回したりして軽いストレッチをしている。藤堂は黙って目をつむっていた。

そして、全員がクラウチングスタートの構えをとる。

頭を下げる。

スターターが「よい」という声をあげる。

スターターピストルが天高く掲げられる。

藤堂が腰を浮かせる。頭は上げない。

火薬の爆発音が響く。

全員が一斉に走り始める。

彼らの後方には砂埃が舞いあがる。

藤堂が前へ出る。

その後を追うように、足の速い生徒がくる。

二人は加速を増していく。

足の速い生徒が藤堂を追い抜く。

白いゴールテープを切る。

藤堂は二着だった。

藤堂は僅差で負けてしまった。

鹿島は、その様子を、息をのんで見守っていた。周囲の歓声や応援などは、一切聞こえなかった。ただ、藤堂だけを見ていた。後ろから彼を見ていたので顔は見えなかったが、フォームは完璧だった。あそこまでに完璧な走りを見るのは初めてだった。藤堂は本番に強

かったのだ。

第一レースが終わると、間もなく第二レースが始まった。しかし、第二レースが始まってもお、鹿島のクラスはざわめいていた。

「なんで藤堂が二着なんだ」

「あいつ、運動出来たんだ」

「俺たちも負けてられない」

などと、様々な意見が飛び交っていた。中には、まぐれだと言いきる生徒もいた。が、これは間違いなく藤堂の努力の成果だった。人は、明確な目標を持った時、もっとも強くなる。彼にとっての目標は、『父親と共に自分も勝つ』ということだ。自分が負けてしまえば、父親も負けてしまうということが彼を強くしているのだ。

それから、第三レース、第四レースと進行していった。そして、鹿島の番がやってきた。

緊張はない。落ち着いている。

ゆっくりと体を動かし、スタートラインに立つ。

クラウチングスタートの構えをとり、練習を思い浮かべる。

隣にいるのは藤堂だ。

鹿島はそう思うことにする。

スターターが掛け声をあげる。

ゆっくりと腰を上げる。

紙火薬が爆発する。

直進し、素早く顔を上げる。

腕を素早く振る。同時に足も動く。

真っ直ぐ前だけを見て走る。

はちまきが風にたなびく。

素早く走るさまは忍者のようだ。

真っ白な勝利の紐を切る。

鹿島は一着だった。

走り終えた鹿島は、一つ小さな溜息をつき、立ち止まった。全力は出していなかった。白組の応援席から、歓声が湧き上がる。スタート地点に並んでいるクラスメイトからも「すごいぞ！」という声が聞こえる。喜色満面だ。

「やった」

鹿島は思わず口に出した。全力でかからない状態で勝利を勝ち取ったのだ。嬉しくないはずがない。これで全力を出せば、どれだけの勝利が待っているのか想像することは容易かった。

走り終えた選手が並んでいる場所へ、鹿島は向かう。今も目の前では壮絶な戦いが繰り広げられている。今走っているのはクラスで一番足が早い生徒だ。とんでもないスピードで駆けて行く。結果は、もちろん圧勝だ。

そうして、六年男子一〇〇メートル走は終了した。選手たちは退場門へ向かい、応援席へと戻る。

応援席に戻ると、藤堂が鹿島に話しかけてきた。

「おめでとう、鹿島君」

「そっちこそ」

「まさかだったよ。一組のあの人に僅差まで追い詰めることが出来るなんて、考えもしなかった。鹿島君のおかげだよ、ありがとう」

「何が？」

「特訓につきあってくれたし、ライバル宣言までしてくれたよね。」

正直、あれがなかったらタイムは伸びなかったと思うよ」

鹿島は藤堂の率直な感謝の言葉に、照れた。頭をかき、鼻を指でこすった。

「そういうのは、クラス対抗リレーで勝ってからだ」

二人はまた、顔を見合せて笑った。最高に幸せだった。もう、鹿島と藤堂の勝利は約束されたようなものだった。たった一ヶ月で何が変わるものか、と人は言うが、何もしなかった人間には分かるまい。人は一ヶ月で変わるものだ。

「そうだね。これからが本番だしね」

そうして二人が話していると、鹿島のリレーチームのメンバーの一人がやってきた。その生徒は複雑そうに、顔を歪めている。しかしその顔に、少しだけ申し訳なさそうな色が浮かんでいる。

「トシ。お前、本当は足早かったんだな。他の奴らの分も俺から謝っておくよ。今まで馬鹿にして本当にごめん」

そう言つと、その生徒は深々と頭を垂れた。それを見た鹿島は、何とも言えない気分になった。見返すはずのクラス対抗リレー前に見返してしまった気分だった。彼の素直な気持ちは嬉しいが、もう少し後で言つて欲しかった、と鹿島は思う。

「最後のクラス対抗リレー。一緒に頑張ろうな！」

生徒が手を差し出した。鹿島は複雑な気持ちだったが、彼の気持ちを素直に受け取ることにした。右手を差し出し、ぎゅっと握った。その握手は、今までに感じたことのない、暖かなものだった。

「それじゃ、藤堂君も頑張つて！」

そう言つと、彼は去つていった。

「まだまだ。まだまだやってやるぞ。一〇〇メートル走なんかで勝つても意味はないんだ。最後まで、やってやる！」

藤堂は、そう呟く鹿島の顔をじつと見つめていた。

九 一人じゃない

九

午前中のプログラムが終了し、休憩時間になった。

一〇〇メートル走では、白組がトップを独占していたが、その後の下級生が行う競技で、他の組に差をつけられてしまった。中でも、二年生が対象になる、『借り物競走』はひどいものだった。

白組以外はすんなりとモノを見つけることが出来たが、白組はというと、いつまで経っても目的の物が見つからないのだ。参加していた生徒は慌てふためき、ついには、出場していた生徒が泣き出してしまった。結局、その試合では白組は大敗を期した。

他の競技の結果もよろしくなく、一〇〇メートル走での圧倒的勝利は、なかったものになってしまった。現在の紅組、青組との点差は小さくはない。

鹿島は母親、そして父親と共に昼食を食べた。その時間は、彼にとつて、とても心の安らぐ時だった。父親からは「よくやった」と褒められた。今までにここまで褒めてもらったことはあまりなかった。頑張つて良かった、と鹿島は思った。また、父親と母親がいることのありがたみを噛みしめた。藤堂には、こんな思いは出来ないのだ。

昼食を食べ終わると、藤堂のいる所へと向かった。

しかし、彼はどこにも見当たらなかった。鹿島は諦めて両親の元へ帰ろうとした、その時。藤堂が姿を現した。鹿島は素早く藤堂に

近寄り、笑顔で話しかけた。

「もう昼ごはん食べた？」

「うん」

藤堂に元気がない。

鹿島はじつと藤堂の顔を見つめてみる。そして察した。

「ごめん。来てない……んだよね？」

「うん。お母さんは、お父さんを見ておかないと駄目なんだって。晴れの舞台……見てほしかったな」

藤堂は少しはに candemiser。しかし、それが本心からきているものではないことは明らかだった。

「元気出せよ。藤堂が頑張らなくちゃ、お父さんも助からないんだろ？ お父さんを助けられるのは、お医者さんじゃなくて、藤堂なんだぜ？ もしリレーで勝ったら、嫌になるほど聞かせてやれよ。僕は勝ったんだって。信じてくれなかったら、その時は、俺は証言してやるよ」

とにかく思いついた励ましの言葉を並べ立てた。それに意味があるかどうかは分からないが、何も言わないよりはマシだと、鹿島は判断した。

「でも、やっぱりさびしいんだ。みんなはああやって、楽しそうにしているのに、僕には誰もいない。僕は独りぼっちだ」

「俺がいるじゃんか」

鹿島は少しすねた風な顔をした。小さく頬を膨らませ、少しだけ顔を下に向けている。

「鹿島君」

「俺がいるだろ！ そりゃ一ヶ月しか一緒にいなかったし、クラス一緒だったのにずっと話をしなかったけど……。それでも、藤堂には俺がいるじゃん。一人じゃないだろ！」

藤堂の肩を両手でつかみ、揺さぶった。

藤堂は小さく笑う。

「うん、僕には鹿島君がいる。ごめんね、最後の最後まで弱気で。僕、最後まで頑張るよ。ありがとう。僕は、一人じゃないよね」

それから、鹿島は彼に何も言うことが出来なかった。一人の肉親に頼ることも出来ない藤堂を心の底から憐れんでいた。その行為が良い行いだとは思えない。けれども、そうするしか出来なかった。親がいる鹿島に、親のいない藤堂の気持ちは理解出来ない。

自分の親が危ない状況にいる時、自分に親がいない時、自分はどいういう気持ちになるだろうか、と鹿島は想像した。けれども、今、日常的に会っている人間がいなくなったり、病気で危なくなることなど、考えられなかった。どれだけ想像を働かせても、親の存在を消すことなんて出来なかった。藤堂の存在も、消すことが出来ない。朝起きて、一緒にご飯を食べて、挨拶をして、行ってきますの挨拶をして、夕方にはまた会って、晩ご飯を食べて、夜にはおやすみの挨拶をする。それが当たり前のことなのだ。人は、日常が崩壊する時を知らず、またその時を考えようとしめない。当たり前が、当たり前前に存在すると錯覚している。それは、いつ崩壊してもおかしくないのにも関わらず、だ。日常を不変のものと疑わない。しかし、それは異常なことではない。それが当たり前なのだ。

鹿島は、藤堂と別れると、真っ直ぐ両親の元へ向かった。急に愛しくなったのだ。親のいる今のうちに、甘えておきたかった。

日常が崩壊する悲しさを知りたくなかった。

十 フラッシュバック

十

午後のプログラムが開催される時間になり、鹿島は保護者席から応援席へと戻っていった。そこにはすでに藤堂の姿があった。彼の表情は依然として固かった。何とかして励ましてやりたかったが、鹿島には何も言うことは出来なかった。ただ、彼の隣に座り、気持ちを落ち着かせてやることしか出来なかった。

午後の最初のプログラムは、応援合戦だ。

各組の応援団が運動場の真中に立ち、演技をする。その時、掛け声をクラスメイトがかける。その演技の精巧さなどを判断して、審査員が点数化するのだ。

紅組から演技が始まる。

紅組は長い、赤い布のついた棒を振り回し、踊っていた。なんでも、その布は燃え盛る炎をイメージしているという。良い発想をしているな、と鹿島はずっと見とれていた。

次に白組の演技が始まる。

応援団が素早く運動場の真中に立ち、演技を始める。鹿島たちも大きな声を張り上げて演技を盛り上げた。

青組に、特筆すべき点はなかった。

それから、一年生と六年生が合同で行う玉入れ、五年生による組み体操、一年生から四年生までの各々のクラスのダンス、四年生による騎馬戦などが行われた。どれも、気合が入っていて、見えて

退屈しなかった。

思わず「頑張れ！」と叫んだり、「ああ……」と落胆の声を漏らす者が多くいた。鹿島もその中の一人だった。

去年までは、ここまで余裕を持って競技を眺めることは出来なかった。自分の出番が怖くて怖くて仕方がなかった。ずっと緊張して、他の景色なんて何も見えなかった。しかし、今年はどうだ。心に余裕があり、他の競技を面白おかしく観戦出来る。一つの競技の結果に一喜一憂出来る。この事が、どれだけ幸せなことだろうか。

去年は、二ヶ月かけて練習したにも関わらず、緊張していた。今年は去年の練習期間よりも一ヶ月も短いのに、この余裕だ。この差は何なのだろうか。鹿島はすぐに違いを察した。去年は、ただ闇雲に走って練習した気になっていたのだ。中身も何もない。ただ、走っていただけだった。だが、今年は藤堂によって入念に練り、組まれたメニューをしっかりとこなした。ただ走るだけではない。フォームから、なにからなまでに綿密な計画のもとに実行した。この違いはかなり大きい。身体的にも、精神的にも、だ。

『これより、五年生による、四×一〇〇メートルリレーを行います！ 選手入場！』

アナウンスと共に、五年生のリレーメンバーが入場してきた。第一走者がバトンを持ち、しっかりと整列している。

スピーカーから流れる曲が、『クシコス・ポスト』に変化する。

去年の鹿島も、こうやって入場していた。

彼の中で、少しの恐怖が芽を出す。

第一走者からアンカーまでが指定位置につき、一人の生徒が「絶対勝つぞ！」と叫んだ。それに応えるかのように「おう！」という声が聞こえた。すごい気合いだ。

スタートラインに立ち、大きく深呼吸をしている。アンカーの方を見ると、かなり緊張しているのか、ぼうつと突っ立ったままだった。彼は白組だった。

スターターピストルが叫びをあげ、それから逃れるかのように選手が走りだす。まるで何かに追われているかのように必死である。

第一走者が第二走者にバトンを手渡す。どのチームも引けを取らない。差はほとんどない。わずかに白組が優勢か。

第二走者がカーブを曲がり、第三走者に力強くバトンを渡す。

第三走者からアンカーにバトンが渡る。差はかなりある。

残すはカーブとわずかな直線だけだ。白組が優勢だ。

栄光は目の前だ。白組のアンカーが逃げる。

しかしその時。

白組のアンカーがカーブを曲がり切れずに転んだ。

彼は一回転し、ざらついた砂の上に叩きつけられた。

次々に他の選手が彼を抜かしていく。

ただ、それを茫然と眺める彼。

ころころと転がっていくバトン。

その姿を見た鹿島は、身を震わせた。

まるで、去年の自分を見ているかのような錯覚に襲われた。

今まで、必死で抑えつけていた恐怖の芽が花を咲かせてしまった。

その花は恐ろしくいびつな形で、この世にない色をしている。

「いやだ」

どんと恐怖の花が開花していく。

「え？」

隣に座っていた藤堂が話しかける。

「絶対にいやだ！ もうあんな風になるなんて！」

「え、鹿島君！」

鹿島は、応援席から走って出て行った。

鹿島は体育館裏に来ていた。あの光景を見てから、体の震えが止まらなかった。自分も、あの生徒のように転んでしまうのではないか。そう思えてならなかった。

過去の記憶がフラッシュバックする。

嘲笑するクラスメイト。

憐みの表情を浮かべる保護者。

頑張れ、と容易く言う他学年の生徒たち。

諦めるな、と壊れたレコードのように言う教師。

無情に転がっていくバトン。

赤く擦りむけたヒザ。

聞こえない『クシコス・ポスト』。

バトンを拾いに行くみじめさ。

ゴールする時の悲しみ。

そのすべてが鹿島を覆い、彼を恐怖のどん底へと突き落としてしまった。それらは重く、硬く、逃れられない。まるで鎖のように彼を縛り付ける。

知らず知らずのうちに涙がこぼれて止まらない。

鹿島は頭を抱えた。そして、髪の毛をかきむしった。

「いやだ、いやだ、いやだ、いやだ、いやだ、いやだ、いやだ、いやだ、いやだ、いやだ、いやだ、いやだ、いやだ、いやだ、やだやだやだ！」

小さな子供がダダをこねるかのように、同じ言葉を連呼し泣き叫ぶ。力強くコンクリートの床を殴り、その場にくずおれた。頭を何度も左右に振り、いまわしい記憶を消し、恐怖の花を枯らすように。しかし、消える気配もなければ、枯れる素振りも見せない。

「鹿島君、ここにいたんだ」

優しい声。

鹿島が顔を上げると、そこには息を切らせた藤堂の姿があった。

鹿島はまた顔を地面の方に向ける。

「皆、鹿島君がいたよ！ こっち、こっち！」

すぐ行く、と小さく聞こえる。

少しの後、鹿島はまた顔をあげた。すると、そこには彼のリレーメンバーがいた。珍しいことに、藤堂のチームメンバーもいた。

「みんな心配していたんだよ。急に走って行っちゃうから」

ぐすぐすと涙を流しながら、それを聞く。

「どうしたの？」

「去年の……。もういやだ……。あんなの」

藤堂は黙っている。何も言うことが出来ないのだ。何せ、去年の出来事は、黒田から聞いただけだったのだから。人の心の傷にやすやすと触れる行為は罪深い。

「そんなの、気にするなよ。去年は運が悪かったんだよ」

その言葉は、藤堂から放たれたものではなかった。それは、彼を一番見下していた生徒からのものだった。何度も鹿島に棄権を迫った生徒である。彼は、去年も同じクラスだった。奇しくも、同じリレーチームだった。

「でも、またあんなふうになったら……。俺、もう生きていけない」

「校長先生も言ってたろ？ どの組が優勝しても、誰が勝っても負けても、拍手で称えてあげてくださいさ。俺たちはお前が負けでも、転んでも、何も言わない。拍手で迎えてやる。なあ、皆」

「もちろんだ！」

即答だった。

鹿島は、涙を止めようとしたが、止まらなかった。むしろ、どんどんあふれてきて、さっきよりもひどくなっている。拭いても、拭いても、拭いても。

「それにさ、トシ。練習頑張ってたんだろ？ 百メートル走の結果を見れば嫌でも分かる。そんなに頑張ったやつを否定する権利なんて、俺たちにはなかったんだよ」

「なんでそれを？」

「藤堂君から聞いた」

「ごめんね、鹿島君。勝手なことして」

鹿島には、藤堂の謝罪の意味が分からなかった。本当に悪いのは自分なのに。なぜ藤堂が謝っているのだろう、と。

『最終種目、六年生のクラス対抗リレーに出場する選手は、入場門前に集まってください！』

最終招集のアナウンスが流れる。

「さあ、勝ちに行くぞ！」

「鹿島君！ 行こう！」

他のメンバーたちも同じことを言う。

「うんっ！」

藤堂が手を差し出し、鹿島を置きあがらせる。涙を拭き、正面を見据える。

「ねえ、円陣を組もうよ」

藤堂が言う。

「お！ いいな。やろっやろっ」

合計八人が綺麗な円になる。そして、中心で手を重ねる。

「絶対勝つぞ！」

せーの、と小さく呟く。

『おう！』

十一 望まぬ「おめでとう」

十一

ついにやってきた。最後の大舞台だ。

八人は入場門に行き、しっかりと整列する。

鹿島も、藤堂も、そして他の生徒も、皆顔つきが変わっていた。新しい友情の名のもとに、絶対に勝ってやるという意志を固めた。もう彼らに敵などいないだろう。

現在の点数は、紅組が四九〇点、白組が四五〇点、青組が三〇〇点だった。クラス対抗リレーの点数は、一着が一〇〇点、二着が五〇点、そこから先は点数が落ち、四〇点、三〇点と続いている。

鹿島たちの白組が優勝するためには、少なくとも一人が一着を取る必要がある。つまり、鹿島が藤堂かの、どちらかが逃げ切らなくてはならないのだ。責任重大である。

鹿島は深呼吸をして、気持ちを整える。

『それでは、ただいまより、最終種目、六年生によるクラス対抗リレーを行います！ 選手入場！』

アンカーである、鹿島と藤堂を先頭にしてスタートラインまで行進していく。スピーカーからは依然として忌まわしい『クシコス・ポスト』が流れている。

第一走者がスタートラインに立ち、第二走者がその後ろにつく。クラス対抗リレーは、一人二百メートル走る。そのため、瞬発力だ

けではなく、ある程度の持久力も必要とされる。

自分の鼓動が速くなるのが感じられる。鹿島は、藤堂の方を無意識に見る。その視線の先には、落ち着いた表情をした藤堂の姿があった。彼は鹿島に気付くと、拳を握り、親指を天に向けてほほ笑んだ。不思議と、鹿島の中から緊張は消えていた。

スピーカーから流れる曲が変化する。『剣の舞』だ。作曲者はハチャトゥリアンである。この曲は、運動会を締めくくる最高の舞台にふさわしい名曲である。

『位置について』

第一走者が鹿島を見て、にっと笑う。右手にバトンをしっかりと握る。自分の位置を確認すると、静かに頭を下げた。

『よい』

スターターがスターターピストルを天高く掲げる。

銃身が太陽に照らされて鈍い光を放つ。

そして、勝利へ向かうための一発が鳴った。

すべての走者が勢いよく駆けだしていく。

第一カーブを曲がりきった時、白組の二チームは後れを取っていた。さすが、クラスでも選りすぐりの人材を抜てきしているだけある。どのチームも引けを取らない。直線コースで青組の一チームが紅組を抜かしていく。白組は必死に四チームの後を追う。

第二カーブで、インコースに入り損ねた白組の一チームがさらに差を広げられていく。そのチームは、藤堂のチームだった。鹿島のチームは、その前を走っている。

白組の第二走者にバトンが手渡される。次いで、第三走者がレーンの中に入り、待機する。

鹿島のチームの第一走者は息を切らせて話す。

「ごめん、スタート出遅れた……」

寂しげに頭を垂らし、申し訳なさそうにする。

「まだ大丈夫！」

そんな会話をしている間にも、戦況は刻一刻と変化していく。鹿島のチームも、藤堂のチームも、ほとんど差が広がっていた。

運動会というものは、想像出来ないほどに真剣勝負の世界である。その皆が戦う様は、まさに戦争である。騎馬戦が、その良い例であろう。戦況は刻一刻と変化し、脱落者も出る。しかし、脱落者にひるんでいる暇はない。ひるんでいては、次は自分がやられてしまうのだ。こういう場面では、気をしっかり持つ以外に、自分を守る術はない。

第三走者にバトンが手渡される。鹿島はレーンの中に入る。レーンの中には、すでに藤堂がいた。

今の順位は紅組、青組、青組、紅組、白組、白組である。今のままでは、勝つことは難しい。だが、第三走者にバトンを手渡してから、差は徐々に縮まっていった。だが、順位が変化するまでには至らない。

白組の二チームの第三走者が第二カーブを曲がりきる。とうとう鹿島と藤堂の出番だ。

次々に他の組のアンカーが走りだしていく。そして、鹿島にバト

ンが手渡され、それからすぐ藤堂にバトンが手渡された。バトンは熱く、汗で濡れていた。バトンからは、みんなの思いが込められている気がした。

鹿島はそれを握りしめて走り出した。

短い直線を全力で走る。

カーブで、少しでもアウトコースを走り、四位の紅組を抜かす。

鹿島は先の青組をも追い抜く。

少し遅れて、藤堂もその青組を追い抜かす。

応援席が湧き上がる。

保護者席からも、歓声が聞こえる。

アナウンスをしている人も凄いい声で実況している。

直線コースで、もうひとつの青組を抜いて行く。

砂埃を舞いあげ、汽車のように走っていく。

残すは最後の紅組だけだ。

第二カーブで、鹿島が最後の紅組の横を風のごとく走り抜けた。

藤堂もその紅組を追う。

差は縮まっていく。

藤堂も紅組を追い抜いた。

勝利はもうすぐだ。

カーブを曲がりきる……、

その時。

鹿島の足が絡まる。

タコの足のようになぐねと曲がった気がした。

バランスを取ることが出来ない。

鹿島はカーブを曲がりきれない。

視界がぐるぐると回る。

そして、真っ暗になる。

砂埃が激しく舞い上がる。

彼の耳には、落胆の声と、『剣の舞』だけが聞こえる。

バトンが遠くに転がっていくのが見える。

すぐに、鹿島の横を藤堂が走っていく。

自分の目の前を走り去っていく紅組と青組が見える。

目をつむり、真っ赤な世界を見る。

また、去年の記憶がフラッシュバックする。

涙すら流れない。

終わった。藤堂にも、他の奴らにも負けた。でも、藤堂は勝ってくれた。白組の優勝だ。俺はこのまま、優勝の余韻に飲まれて忘れられればいい。そうすれば、みじめさも、何もないんだ。

意識をシャットダウンしようとする。

「鹿島君、大丈夫？」

真っ赤な世界が黒く変化する。人影のせいだ。

一体誰だろう。

「鹿島君！」

鹿島はゆっくりと目を開く。すると、すでにゴールをしているはずの藤堂の姿があった。

「え？ 何で……」

「目の前で転んじゃうから、心配で」

「そんな。じゃあゴールは？」

「してないよ。それよりも、鹿島君が心配なんだ。立てる？ 一緒にゴールに行こう？」

藤堂は鹿島の腕を自分の肩にかけ、持ち上げた。鹿島もゆっくりと自分の力で立ち上がる。そして、ゴールに向けて歩き出す。

なんてみじめなんだろう。

応援席、保護者席、教員、そのすべてが彼らを祝福している。

あのまま藤堂が勝っていればこんな事にはならなかったのに。ゆっくり、ゆっくりとゴールに近づいて行く。

藤堂のせいだ。

そして、栄光のゴールへ辿りつく。

こんな目に遭うのは、全部藤堂のせいだ！

「おめでとう！」

藤堂が笑顔で述べる。

運動場が拍手の音だけで埋められる。

しかし、鹿島は笑顔ではなかった。それとは逆に、藤堂に対する怒りと、憎悪に燃えていた。鹿島は、あのまま倒れていたかった。あのまま、落胆と絶望に飲み込まれていたかった。なのに、藤堂に助けられてしまった。

彼は、藤堂の憐みが気に食わなかった。自分さえ転ばなければ、藤堂は一着でゴール出来た。そうすれば、白組の優勝は決まっていたのだ。なのに、藤堂は鹿島を助けに来た。そのせいで、白組は勝ちを逃してしまった。鹿島は、重大な責任を感じた。その責任を負わされたことに、鹿島は怒っているのだ。

鹿島は黙って藤堂の手を振り払い、無愛想に退場していった。

あの時の、悲しそうな藤堂の顔が、今でも忘れられない。

そうして、小学校生活最後の運動会は幕を下ろした。

戦争に負けた悲しみと、親友に対する憎しみだけを残して。

十二 絶交

十二

教室に戻ってから、鹿島は藤堂と一言も会話をしなかった。藤堂は、すぐに保健室に行くことを勧めたが無視をした。もう、誰の憐みも受けなくなかった。藤堂だけでなく、クラスメイトも彼と同じことを言ったが、無視をした。その他にも、気にするなどの、失敗は誰にでもあるだの、安っぽい慰めの言葉をかけられた。その言葉は、弱者をいたぶる刃だ。一言一言が放たれる度に、鹿島は藤堂のことを強く憎んだ。

藤堂が憐みをかけなければ、これだけみじめな思いをすることはなかった。藤堂が勝っていれば、皆は優勝に酔って自分を忘れてくれたのに。藤堂が変な期待をさせなければ。藤堂が特訓に誘わなければ。そんな思いがずっと鹿島の脳を支配していた。怒りと憎悪が鹿島を押しつぶす。

しばらくして、終礼が終わり、クラスメイトが帰り始めても、鹿島はじつと机に突っ伏していた。誰が教室に残っているのかも、今が何時なのかも、一切分らない。

どれくらい経ったか。鹿島が顔を上げると、藤堂ただ一人が教室に残っていた。彼は申し訳なさそうに下を向き、まるで、特訓を始める前の彼に戻ったかのように感じられた。

顔を上げた鹿島に気付いた藤堂は、小さくつぶやいた。

「ごめんね、鹿島君」

「うるさい」

「全部、僕のせいだよ」

「うるさい」

鹿島は徐々に声を荒げていく。

「僕が勝っていれば良かったんだよね」

「うるさい！」

鹿島は机を叩いて、席から立ち上がった。

「そうだよ！ 藤堂、お前が勝っていれば、俺はこんなにみじめな思いをしなくて済んだんだよ！ そもそも、お前が特訓に誘ったからこうなったんだ！ 全部……全部お前が悪いんだ！ 俺が転んだのも、こんなに悲しいのも！ 全部お前が悪いんだ……みんなして根拠ない言葉で俺を調子に乗らせて。勝てるって錯覚させて。それで待っていたのがこれかよ……。ふざけんなよ……」

鹿島は涙を流した。唇が震えて止まらなかった。涙も、震えも止められなかった。今は、声を出さないだけで精いっぱいだ。

「でもね、これだけは言わせて。鹿島君が頑張ったことは無駄じゃなかったはずなんだ。それだけ、覚えておいてほし……」

「うるさいって言うてるだろ！ 藤堂に何が分かるんだよ。もう、いいから帰れよ！ 二度と俺に話しかけるな！」

鹿島はその言葉を吐き捨て、リュックを背負って教室を出て行っ

た。彼が出て行った後には、藤堂一人だけが取り残された。

「鹿島君。短い間だけど、一緒にいれてよかった」

薬品の匂いが漂う保健室。

黒田はオキシドールを布に染み込ませ、鹿島の傷口にあてる。

「いてっ」

あまりの痛さに、鹿島は足をばたばたとさせる。

「それにしても、派手に転んだよな」

「言わないでよ。忘れたいんだから」

頬を膨らませ、俯く。そして、痛みを堪える。

「それでも、今日の運動会は感動的だったな。最後の藤堂君の行動には胸を打たれたな。ありや素晴らしいよ。優勝よりもお前を取ったんだぞ？」

また、鹿島の傷口がえぐられる。傷口は徐々に膿みはじめる。

「あんなやつ、死んじゃえばいいんだよ」

「何言っただ、お前は」

黒田はオキシドールを机の上に置き、鹿島を睨みつけた。

「あいつが、俺を助けなければ白組は優勝だったのに。それなのに、俺の所に来てさ。何が『大丈夫？』だよ。俺がどれだけみじめなのかも知らずに。さつさとゴールして、俺を見下せばよかったんだよ。ああ、馬鹿らしい」

「……それで？ 藤堂君はどこだ？」

「知らないよ。あんな奴とは絶交したんだ。どっか行っちゃえばいいんだよ、あんな奴」

その時、鹿島の頬に衝撃がはしった。

その衝撃は、転んだ時よりも強烈だった。

鹿島は椅子から転げ落ちてしまった。

「な、何すんだよ！」

「おい。お前、あの時藤堂君がどういう気持ちでお前を助けに行つたのか、分かっているのか？ 見捨てようと思えば見捨てられたお前を、わざわざ優勝を逃してまで助けに来たんだぞ？ その意味が分かっているのか？」

黒田の目は怒りに満ちていた。鹿島を見下ろし、拳を固く握っている。今にもそれは振り下ろされそうだった。これが、怪物黒田といわれる所以ゆえんなのだと、鹿島は思った。

「だからなんだよ！ 見捨てたければ見捨てれば良かったじゃないか！ なんだよ、あんな偽善者！ 黒田先生だってそうだ。頑張れだのなんだの言つて俺に期待させて。俺がこうやって失敗するのを見て楽しんでんだろ！」

「お前……」

黒田が鹿島の襟元を掴み、鹿島の体を宙に浮かせる。凄い力だ。だが、黒田はすぐに彼を元の位置に降ろした。

「もついい。帰れ」

「言われなくても帰ってやる！ もう二度と来ないからな！」

保健室から出ると、鹿島は真っ直ぐに家へと向かった。

道中、心に大きな穴が開いた気がしていた。それも、永遠に埋まりそうもない、とても、とても大きな穴が。誰に慰められようとも、たとえ自殺しても、埋まらない、大きな穴。

真っ赤に燃える夕日が、過去の思い出を焼きつくしているように見える。烏が、やけにうるさい。

本当に、藤堂が悪かったのかな？

十三 手紙

十三

運動会が終わってからというもの、藤堂は姿を見せなくなった。鹿島の前に姿を現さないのではなく、学校にすら来ていないのだ。クラスでも噂されるようになってきた。死んでしまったという噂もまことしやかにささやかれている。

鹿島は、あれからずっと罪悪感にさいなまれていた。怒りと憎悪は、悲しみと後悔に変わっていた。

なぜあんなことを言ってしまったのか、今の鹿島には理解出来なかった。鹿島は、彼からの優しい抱擁を痛めつける刃だと勘違いしてしまっていた。藤堂は、優しく近付いて、鹿島を切り付けるのだと。しかし、実際は鹿島が藤堂を切りつけていた。鹿島はより残酷な斬撃を藤堂に加えることになってしまった。

藤堂のあの判断は、決して容易なものではなかっただろう。クラスの間が、藤堂の行為を認めてくれるとは限らないのだ。もしかしたら、ひどい誹謗中傷を受けるかもしれないのだ。そのリスクを冒してまで、彼は鹿島を助けたのだ。それは憐みではなく、両親から受ける愛よりも暖かな真の愛情だったのだと鹿島は思う。

それを鹿島は無下にした。それどころか、藤堂の気持ちすべてを踏みにじり、彼のしてくれたことすべても否定してしまった。藤堂が特訓に誘ってくれなければ、もっとみじめな結果が待っていたというのに。

放課後、鹿島は二度と行かないと言った保健室に行くことにした。黒田にも、謝らなければならぬ。真剣に鹿島を治療して、何度も

励ましてくれた人に。

保健室の戸を開けると、黒田が窓際で佇^{たたず}んでいた。手には手紙らしきものが握られている。

「もう、二度と来ないんじゃないのか？」

黒田は冷淡な声をしている。怒っているのか、それとも悲しんでいるのか、まったく声から読み取れない。

「その、黒田先生。ごめんなさい。えっと、藤堂のことなんだけどさ……」

「藤堂君なら、さっきここに来たぞ」

「え？」

「こいつをお前に渡してくれとさ。ほら」

黒田は、手に持っていた手紙を鹿島に渡した。

「お前は、本当に良い友人に恵まれたな。うらやましいくらいだ」

鹿島はそれを広げると、綺麗な字で、こう記されていた。

鹿島俊夫君へ

まず、運動会のことを言い訳させてほしいです。

僕は、白組の優勝よりも、鹿島君を心配しました。その理由は、僕は、鹿島君が好きだったからです。でも、これは男の子が女の子を好きになるような感情ではありません。人として、鹿島君が好きなんです。いつも前向きで、ちょっと泣き虫で。そんな鹿島君が大好きです。それに、いつも僕を心配してくれました。僕が泣いている時も、励ましてくれた。だから、僕は鹿島君を放っておけなかったんです。絶対に、鹿島君をバカにしてやろう、とかそんなことは一切考えていませんでした。本当にごめんね。

もうこれ以上、運動会のことは書きません。
それと、ずっと学校に行けなくてごめんね。

あの運動会の日、僕のお父さんは死にました。もう僕は悲しくて、悲しくて仕方がありませんでした。今日まで、手が震えて、鉛筆を握ることすら出来ませんでした。だから、学校も休んでいました。お父さんが死んじゃったのは、僕が負けたからなのかな？ 今ではもう分かりません。勝ってたらどうなった、とか考えたくありません。でも、鹿島君のせいじゃないのは確かです。そのことは気にしないでください。謝らなくてもいいです。

それで、僕は今日転校します。お母さんの実家に帰るんだそうです。そこは遠くて、鹿島君にはもう会えないらしいです。本当に寂しいです。

鹿島君、短い間だったけど、本当に楽しかったです。こんな形でしかお別れを言えなくてごめんなさい。出来れば、直接言いたかったけど、きっと鹿島君が嫌がると思って、手紙で伝えることにしました。もし、怒らせちゃったならごめんなさい。こんな意気地なしの僕を許してください。

鹿島君に会えて、本当に良かったです。きっと鹿島君がいなければ、僕はクラスでもずっとひとりぼっちだったと思います。もっと鹿島君と遊びたかったな。

あまり長くなるといけないので、これで終わりにします。
今までありがとう。また、どこかで会えると良いね。

藤堂 博

「俺……なんてことを……」

鹿島は、手紙をぎゅっと握りしめた。

手紙を読み終えた鹿島は、その場で泣いた。全身を震わせ、全力で。今までの分も、これからの分も、すべての涙をこの時流した。

胸にぽっかり空いた穴に、涙が吸い込まれていく。しかし、いつまで経っても、その穴は涙で満たされない。それどころか、どんどん穴は大きく、深くなっていく。鹿島は、涙の海に溺れた。

手紙はぐしゃぐしゃになっている。

藤堂のお父さんは自分が殺してしまったのかもしれない。藤堂と別れることになったのも、全部自分のせいだ。全部、全部！俺はなんてことをしちゃったんだ……。

鹿島は、別れは言えなくても、せめて、せめて藤堂に謝りたかった。そして、今まで言うことのなかった感謝を述べたかった。

ただ一言。ありがとう、と。

十三 手紙（後書き）

次回が最終話となりますが、もやもやとした気分になりたくない方、この話を純粹なもので終わらせることを希望する方などは、最終話を読まず、この話を最後としてください。

十四 ありがとう（前書き）

この話を純粋な「運動会」のお話として終わらせたい方などは、この最終話を絶対に読まないでください。

十四　ありがとう

十四

すべてを語り終えた時、暗かった空からは光が差し込み、雨もすっかりあがっていた。傘はもう不要だ。彼の目の前に置かれている茶はとうの昔にぬるくなっていた。机の上には、飴の食べカスがいくつも置かれている。

鹿島は小さくため息をつく。

「これで、あの頃のお話は終わりです」

鹿島は、ハンカチで少し涙を拭く。

「なるほど……とても感動的なお話でしたね」

「感動的かどうかは知りませんがね」

鹿島は苦笑いをして、ぬるくなった茶を一口すする。短髪の男は、髭を撫でている。かすかに涙を流しているような気もする。

「それで、あなたはその子を探していると？」

「ええ。大々的な搜索をしているわけではないですけどね。見つければ、その子に謝って、一言だけ、ありがとうと言いたいのです。あの時言い忘れたありがとうをね。もう忘れているかも知れませんがね」

短髪の男はティッシュで鼻をかみ、

「それじゃあ、かなり遅くなりましたけど商談を開始しましょうかと、話を切りだした。」

「おっと、話に夢中ですっかり忘れていました。名刺です」

「それでは、こちらも」

互いの名刺を受取り、まじまじと眺める。

それから、商談が始まった。

それからの商談は、鹿島が予想していた以上にスムーズに進んだ。商談は成功し、これからもひいきにしてくれるという。鹿島はその結果に喜び、取引相手も終始笑顔だった。

商談が終わると、二人は雑談をし、鹿島は会社を出た。その際、短髪の男がわざわざ会社の入口まで送ってくれた。

鹿島が立ち去ろうとした時、短髪の男が少し涙を流しながら言う。

「それでは、これからも頑張ってください」

「何をですか？」

「あの子のことですよ。きっと探し出せます。私も、出来る限りの力添えをさせて貰います」

鹿島はほほ笑む。

「そうですか、それは助かります」

鹿島は、軽く会釈をしてから会社を後にした。水たまりを蹴とばし、会社に戻るべく元来た道を帰る。イチヨウの木から水滴が滴り、水たまりに落ちる。

ゆっくりと歩を進めていくと、鹿島のズボンのポケットで携帯電話が震え始めた。

「はい、鹿島です」

『僕だ。商談は終わったか？』

「ああ、藤堂君か。今終わった。契約もしっかりもらったよ。これから、出来る限りのサポートもしてくれるらしい」

鹿島は明るい声で言う。

『そうか、それは良かった。人の情に訴えるというのは、本当に使えるものだ。ところで、またあの話をしたのか？』

「もちろんだらう。今日の相手は特別に同情していたよ。涙まで流

してね」

『はは。本当のことを先方に話したら、どうなるかね？』

「俺は、嘘は言っていないのだから、どうにもならないさ。ただ、実話を商談に使っているだけだ。この、心に響く良いお話を提供してくれた藤堂君には、感謝しなくちゃいけないな。皆例外なく同情して、その勢いで契約書にサインしていく。君は、会社の神様だ」
『そんなに褒めるんじゃないよ。鹿島君』

イチヨウ並木道に笑い声がこだまする。

それから、ぷつりと電話が切れた。

鹿島は少し口元をゆがめ、ほくそ笑む。

「ありがとう、親友の藤堂君」

十四 ありがとう（後書き）

これで、『君へ』ありがとう」』は完結となります。

私の作品に興味を持たれましたら、前作『黒い咆哮』の方も、どうぞ宜しければ読んでみてください。作者の僅かばかりの成長が読みとれるかと思います。

それでは、これまでお付き合いいただきありがとうございます。

読者の方と、創作活動を愛するすべての人に感謝と敬意をこめてまた、次回作でお会いしましょう。
お疲れさまでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0188n/>

君へ「ありがとう」

2011年3月6日15時17分発行